

2024. 3. 30. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『長かったのか、それとも…』

昨日をもって令和5年度が終了しました。実は職員室内の机配置もすっかり変わり、新年度バージョンになっています。新しい場所でパソコンをたたき先生の姿を見ながら、その心境を想像しています。生徒もそうでしょうが、新しいことに向かう時、不安なドキドキと期待に満ちた“ワクワク”が入り混じりますよね。



軽音楽部の卒部コンサートより

多分教職員もその両方を抱えながら新しい年度の構想を練っていることだと思います。

さて、京都光華中学校高等学校の校長としての1年が過ぎました。『長かった』と思う部分と『“あっ”という間だった』と思える部分とがあります。昔も今も、そして大人も子どもも、楽しい時間は早く過ぎるように感じ、逆にしんどい時や上手くいかない時は同じ時間が長く感じるものです。私は基本的にあまりストレスを感じない人間です。と言うか、“しんどい”と覚悟することがあっても、気持ちの切り替えが結構上手くできる方だと自分では思っています。『なんとかなる!』と思って別のことをしたり考えたり、学校からの帰りに銭湯によってサウナに入って気分転換したりすることも少なくありません。お酒が好きなので、そんなときはいつもより少し多めに晩酌して“さっ”と寝てしまうこともあります。また、仏様に手を合わせて状況が変化することを念じることもあります。そんな日常を繰り返しているうちに1年間に過ぎてしまいました。一年というスパンで考えると、やはり“あっ”という間でした。

私の特徴なのか、人間は誰でもそうなのかは分かりませんが、今振り返ってみると先に思い出すのは楽しい方の思い出です。しんどかったこともなくはなかったのですが、そちらが先に出てくることはありません。だから人は生きていけるのだと思います。4月からザッと思い出すままに書き上げます。

生徒との出会い、始業式で4人の中高生が壇上で自分のことを話してくれた。中3生と大文字山登山に行った。春季大会で生徒たちが大活躍を見せてくれた。夏休みは試合やコンサート、コンクールの応援であっという間に過ぎていった。そうそう、中学陸上部が4×100mリレーで全国優勝を果たした。“おおきに祭”と“Move!”は大いに盛り上がった。高校2年生・中学3年生と行った研修旅行と修学旅行。厳粛で感動的な高等学校と中学校の卒業式。そしてカメラを片手に校内を歩く私に向けてくれる笑顔、笑顔、笑顔…etc。こうして思い出してみると、1年なんて本当に早かったです。来年度が今年以上の“ワクワク”な1年になってくれることを願いつつ、今年度最後のエッセイを閉じます。1年間、ご愛読ありがとうございました。

2024. 3. 23. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『人は変わる』

21日（木）、令和5年度の修了式を行い、今年度を終えることができました。一般的に学校では、各学期の終わりに行うのが「終業式」で、学年の終わりに実施するのが「終了式」として区別しています。1年間を終えた今、正直なところ“ホッ”としています。

今年度から本校の校長を勤めることになりました。元々子どもが好きで、生徒と一緒にいることや生徒の活躍する姿を見ることが大好きなものですから、楽しく子どもたちと交わってこられたと思っています。一方、校長としては新しい環境のもとで学校を経営していかなくてはなりません。その面では何もかもが初めてで、戸惑うことも少なくありませんでした。周りの人たちに協力し支えてもらいながらなんとかここまでたどり着けたと思っています。

人は、『周りからどのように思われているのか』ということが気になるものです。中学生や高校生の時期は特にその気持ちが強いとは思いますが、それは社会人になっても同じです。私も、常に『自分は京都光華中高校の校長として相応しい生き方ができているのか』と自分自身に問い続けています。そんな気持ちもあって修了式では次のことを確認しました。高校の卒業式で卒業生に対して最後に伝えた「上向き 前向きの生き方・考え方」をしようというあのメッセージです。今回も、より分かりやすいように反対を示します。「下向き 後ろ向きの生き方・考え方」となります。つまり、消極的で反省や後悔ばかりしているような生き方・考え方のことです。何かをやろうとするとき不安はつきものです。不安に目を向けて“やらないでおく”のが下向きの生き方です。また、反省は大切ですが『あの時のあれがいけなかったから…』と反省や後悔ばかりして自分を責めていては一向に前へ進むことができません。だからこそ、失敗を恐れず目標や目的に向かって突き進むような生き方をしてほしいと思うのです。

こんな話をした後、いつものように感想や意見、決意を求めたところ、8人の中高生が壇上に上がってきました。その中の一人が語ったことが忘れられません。

「私は中学校までいつも下を向いた生き方をしてきました。何をやっても自信が持てなかったし、人前で話をすることもなかったです。でも、この学校に来て、みんなと出会って、生活がキラキラ輝いて、何でもやってみようという気持ちになれました。友達や先生方に感謝の気持ちで一杯です。これからも頑張っていきたいです。」

人は考え方と生き方、環境によって変われるのです。彼女の言葉がそれを証明してくれました。私たちの方こそ、あの生徒から勇気と希望をもらった気がします。みなさん、「上向き 前向きの生き方・考え方」をして人生を変えていきましょう。今年度最後の集会でそんなことが共有できたのではないかと思います。



2023. 3. 17. (SUN).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『中学校卒業式』

昨日、中学校の卒業式を終えました。2日に行った高等学校のそれとはまたちょっと趣が違った素敵な式典になったと思います。

中学生は、高校生よりも感受性が強いせいもあってか、より涙が多かったように思います。また、式後すぐに保護者や教職員、後輩たちに向けたメッセージや歌を披露するというプログラムが計画されていることも感激を大きくしたのだと思います。昨日の豊かなあの時間を思い出しながら、感じたままを綴っておきます。

卒業生は高校生のときと同じく吹奏楽部の演奏する「威風堂々」のBGMに乗って講堂へ入場してきました。高校生に比べると身体が小さく幼い感じはしたもののゆっくりと入場してくる姿に会場の温度が一気に上がるのを感じました。一人ひとりが前を向き堂々と入場してくる姿は凛としてカッコよく、高校生に負けていませんでした。

卒業証書授与は全員に行います。高校のように代表生徒に渡すのもいいですが、私としてはやはり一人ひとりに思いを込めて渡したいです。「おめでとう！」の言葉にその子に応じた一言を付け加えました。「光華高校の“顔”になれ」「京大に合格したら報告において」「全国で活躍できる選手に」「日本一を目指してください」。不登校傾向にあった生徒には一様に「よう来れた、よかったな」という言葉が自然と出ました。病院で闘病中にありながら、一時退院して式に参列できた生徒には「参加できてよかった、よう頑張った！」と言おうとしたものの途中で声が詰まってしまいました。

予行の際に小さかった担任の先生の呼名に対する返事の声も格段に大きくなっていました。中にはひととき大きな声で返事をする生徒もいて、そのたびに胸が熱くなったものです。「仰げば尊し」の斉唱も予行の時以上にずっと声が出ていました。泣きながら一生懸命に歌っている人を見るにつけ、こちらまでもらい泣きしそうになりました。全体を通して厳粛な卒業式が挙行できたと自負しています。

卒業式はそこで一旦閉式するのですが、その直後から別の会が始まります。保護者会主催の会で、卒業生が後輩や教職員、保護者の方に対して歌とメッセージを贈るというものです。概要は聞いていたものの実際に見るのは初めてでした。自分たちで考えたもので、中学生の豊かな感受性がよく表れた素敵な会でした。決して堅苦しくはなく、それでいて崩れていない構成には大いに好感を持ちました。メインは、合唱の合間に、お世話になった先生方一人ひとりに対して「〇〇〇〇して頂いてありがとうございます！」と声を張り上げる場面です。両担任の前には「校長先生、素晴らしい環境をありがとうございます！」と私にまで声をかけてもらいました。皆さん、その明るさと優しさ、元氣と行動力を失わず、次のステージでも活躍してくれることを願っています。



2024. 3. 11. (MON).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『今更ですが…』

中学校の卒業式が今週末に迫ってきました。今、式辞を書いているのですが、彼女らとの大きな思い出に修学旅行があります。そのことを書き始めていたところ、SCGS との交流について出発前から色々とお世話になった現地のガイドさんからメールが返信されてきたので以下に紹介します。前半は私のメール文です。

京都光華中学校校長の澤田です。

先日の修学旅行では、SCGS との交流に際して大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

向こうの生徒さんは、態度や性格が優れているだけでなく、学力も凄く高くて大変驚きました。本校の生徒たちは圧倒されっぱなしだったと思っています。だとしても、子どもたちは大変良い経験をさせてもらいました。それも、田中様のお力があってのことと大変喜んでいきます。ただ一つ残念だったことは、本校生徒によるプレゼンです。インフルエンザの流行で出発直前まで学年閉鎖にしていた関係で、まったく練習ができていませんでした。子どもたちにも「マイナス経験」をさせてしまったのではないかと後悔しています。しかし、本来明るく元気でエネルギッシュな子どもたちです。きっと今回の苦い経験も今後の生活に活かしていくくれるものと期待しています。

〈中略〉 日本についた時には寒さで震えました。シンガポールのあの暑さが懐かしいです。これから卒業までの間、子どもたちと楽しく意義ある学校生活を送って参りたいと思っています。田中様の今後のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

澤田校長先生

〈前略〉 京都光華中学校の皆さんは、シンガポール滞在を有意義に過ごせましたでしょうか？今回、SCGS のご好意により終日学校訪問ができ、本当に良かったです。授業だけでなく部活にも参加でき、また Buddy とたくさん話せる時間もあったので、疲れたかとは思いますが双方にとって実り多き訪問になったのではないかと思います。私は数々の学校訪問などのアレンジをさせて頂いていますが、澤田校長先生の生徒さんを一番に考える姿勢に教育者としての真髓を学ばせて頂きました。

京都光華中の皆さんのプレゼン、とても素晴らしかったですよ。興味を惹く内容で、うまくまとめていました。京都光華中の皆さんともお話しできて、私もパワーを頂きました。せっかく繋がったご縁ですので、是非また SCGS との交流が実現しますよう、また近い将来、SCGS の皆さんが京都光華中を訪問できますよう願っております。

まだまだ寒さが続くようですので、お身体には十分ご注意下さい。 田中孝子

このメールが届いたのは昨（10）日です。すごいタイミングで修学旅行のことを思い出せました。あの時の楽しく有意義な時間を思い出しながら、中学生の卒業に思いを馳せたいと思います。今回も感動的な卒業式を挙げて生徒の心を育てたいです。



2024. 3. 8. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『素敵な卒業式 その2』

前号に引き続き、高等学校の卒業式について綴ります。卒業記念品の授受に続いては「送辞」で、式はここから一気に盛り上がります。

在校生として 2 年生全員が式に出席していましたが、今の生徒会長がその代表です。

普段は眼鏡をかけ、ニコニコしているその子のことが『誰だか分からなかった』くらいに凜として登壇してきました。時候のあいさつに続いて卒業生との思い出を語ります。卒業生のことは、在校生の目にも明るく活発で優しい人たちだと写っていたようです。先輩から学んだ多くのことを次々と語ります。特に「Move!」でのダンスの印象は強かったらしく、その時のことが強調されていました。聴いている卒業生たちも送辞の内容にグイグイと引き込まれ、時に涙を拭いている人も少なからずいました。



さあ、それを受けて「答辞」の番です。1 年間、毎朝元気に挨拶を交わしてきた和太鼓部の生徒が代表でした。丁寧な礼をしたものの、声が詰まってなかなかそれが始められません。会場が静まりかえりました。何とか涙をこらえて声を出そうとしているのが伝わってくるだけに誰もがジッと待ちました。10 秒足らずの間があったでしょうか。ゆっくりと読み上げ始めました。コロナ禍での入学と休校やオンライン授業の不安。そんな中でも新しい友達ができ、その子たちと一緒に楽しみを見つけながら頑張った生活のことが語られだすと、当時を思い出した多くの卒業生たちが涙を流し始めました。仲間存在の大きさ、先生や学校を支えている職員と保護者の方への感謝の言葉が次々をつながれました。一つひとつの言葉に真心がこもっていて深く心を動かされました。特に、進路や日常生活で悩んだ時に寄り添ってくれた担任の先生への感謝を述べた場面ではそちらへ顔を向けていました。担任の先生の表情を見たかったのですが、生徒に向き合っている私がそうするわけにはいきません。きっと最高の気持ちでいたことでしょう。呼名の際に泣いた先生なので、きっとこの時も泣いていたに違いありません。先生の仕事の醍醐味です。ちょっぴり羨ましくも思いました。

「仰げば尊し」の斉唱です。この歌は小学生の頃から歌ってきた卒業式の定番です。歌詞は今も完璧に頭に入っています。しかし、文語表現のこの歌詞の意味が正確に分かったのは中学生か、あるいは高校生の時だったかもしれません。“係り結びの法則”が使われたりもしており、そのことが分かれると一層感慨深いものになります。いつか、生徒たちにこの歌詞の意味について話したいと思っています。久々に合唱を聴いたのですが、やっぱり良いものでした。卒業生の皆さん、改めて「おめでとうございます。」

さあ、来週は中学校の卒業式です。巣立っていった高校生たちの前途に幸多からんことを願いつつ、次の中学校の卒業式に照準を合わせていきます。

2024. 3. 3. (SUN).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『素敵な卒業式』

昨2日、高校の卒業式を終えました。手前味噌ではありますが、とっても良い卒業式になったと思います。予感の前日からありました。卒業式には慣れているはずなのに、式予行の卒業生入場の時にはどういう訳かジーンとしました。更に、卒業生呼名の際にひと際大きな声で返事をした生徒がおり、その瞬間にその子の友人たちが感極まった場面がありました。様子を壇上から見ていた私も、気持ちが分かっただけに思わずもらい泣きしそうになりました。



予行が終わった午後からは、代表生徒の作法等の指導がありました。真剣に練習するうちに徐々に上手くなっていく様子を目の当たりにしました。練習に打ち込む姿が実に真剣で爽やかで、観ていてとっても気持ちがよかったです。卒業生代表による答辞の練習が始まった時には会場を出ることにしました。内容は本番まで知らない方が良いと判断したからです。それほどその答辞も期待できるものでした。

さて、本番です。一段と寒い日になりましたが、会場である大講堂は温かくて快適でした。多くの保護者の方やご来賓皆様に参列していただき、最高の舞台が出来上がりました。ご来賓の入場の際には、予行演習通りに在校生たちが姿勢を入場口の方に向けてご来賓お一人おひとりに対して丁寧に頭を下げます。ここまでできる高校はそうなのではないかと思うほどです。教頭先生の「卒業生入場」の声と共に会場後ろの扉が開き、吹奏楽部の演奏する「威風堂々」のBGMに乗って卒業生たちが凛とした態度でゆっくりと入場してきます。一気に会場が厳かな雰囲気になりました。

「総礼」から式は始まります。導師を勤めるのが私の重要な役割です。続いて「国歌斉唱」と「学園歌の斉唱」です。会場からの歌声が式典を盛り上げました。さあ、「卒業証書授与」です。各担任の先生が自分のクラスの生徒の名前を読み上げます。前日、卒業生に向けて、担任の先生の呼名に対して大きな声で返事をするように伝えました。やってくれました。一人ひとりが予行の時よりもずっと大きな声で返事をし、各自の存在を学校に残してってくれました。その段階で泣いている卒業生も少なくなく、担任の中にも嗚咽しながら生徒の名前を読み上げる先生までいました。その様子を見てもらい泣きたのは私だけではなかったと思います。「大学に行ってエースになってください。」「素敵な幼稚園の先生に成ってください。」「国際的に活躍する人になってください。」「3人の代表生徒にはそう言って卒業証書を渡しました。3人共にこやかに、でも力強く「はい!」とか「有難うございます!」と答えてくれました。

学校長式辞の場面では、卒業生たちが私の方をまっすぐに見つめ、時に頷きながら聞いてくれました。何かを思い出したのでしょうか。涙を流す生徒が現れました。拙い式辞であったとは思いますが、彼女たちの心に私の思いを届けることができたと思ひます。To be continued (次号に続く)

2024. 2. 24. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『充実感のある忙しい一日』

22日（木）、約1か月ぶりに高校3年生が登校しました。朝、校門に立っていると、明るく元気な声で挨拶を返してくれました。改めてこの子たちの存在を感じたところです。

さて、2月22日は聖徳太子のご命日です。仏教精神を教育の基盤としている本校では、我が国に仏教を広めた聖徳太子のご命日に「太子忌」として法事を行っています。そして毎年、この日を高校3年生の登校日に設定し、高校生を代表してこの法要に3年生が参加することになっています。「太子忌」は厳かな中で進行しました。最近は社会に宗教行事が少なくなってきました。特に、葬儀の縮小化やその後の法要の簡略化など、コロナ禍を契機としてその傾向は一気に進行したように思います。

一方で、こういった宗教行事は、若者の成長にとっても大変有効にはたらくと、こうした機会ごとに思っています。生徒の中には深い信仰心のない人も少なくないと思いますが、それでも合掌したり宗教歌を歌ったりする中で、日常生活とは違う心境を感じることができるのではないかと思います。また、法事の際に聴く法話の中に“はっ”とさせられるような気付きがあることも珍しくはないと思います。

また、午後からは本山研修があり、高校3年間（光華中出身の人は6年間）度々訪れた東本願寺に卒業のご報告を兼ねて最後の研修に行きました。集合の際にはブルブル震えるほどのとても寒い日でしたが、御影堂（本堂）の中は風のない分温かく感じられ、生徒たちは落ち着いて仏事に身を置くことができたように思います。生徒の中には、東本願寺の御影堂に入るのはこれが最後となる人もいることでしょう。また、そこで法話を聴くことが最後になる人も多くいると思います。この経験やご法話の内容がすぐに生徒に影響を与えるとは思いません。しかし、いつか何かの時に思い出して、考え方や生き方の糧になるのではないかと期待したりもします。

また、その日には私の友人が本校を訪れてくれました。彼はオーストラリア人で、私の家の近所に住んでいることから、家族ぐるみで食事をしたり一緒にゴルフに出かけたりする仲です。奥様は大手英会話教室の先生で、本人は幼稚園や小学校を訪れては英会話を教えています。実は、私の息子がオーストラリアに行った際には、彼の家に泊めてもらっていました。本校の国際挑戦科（『SAKURA』）の取組に興味をもってくれ、この日が実現しました。約1時間、国際挑戦科の1・2年生たちや本校の多くの教職員と楽しく交流をして帰っていきました。次は直後に彼から届いたメールです。

Thank you-the students are so nice and smart .

Thank you to all the staff and teachers .

生徒や教職員のことを褒められ、家族が褒められたような嬉しい気持ちになりました。



2024. 2. 15. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『不安と期待 自覚と責任』

昨日・今日は最高気温が20℃に迫る勢いで、季節外れの温かさとなっています。校門の両側にある桜の木も『早くつぼみを膨らませないと…』と焦りを感じているのではないのでしょうか。

さて、10日(土)・11日(日)の両日、高等学校の入学試験を行いました。再三書いてきましたが、この試験を“迎える側”として初めて経験しました。これまで、受験生である中学3年生たちには、緊張感を高めさせるためにも高等学校側の対応を大げさなくらい厳しく伝えてきました。例えば、全号にも書いたように「電車の駅やバス停にも先生がいて言動を見ている」とか、「面接の先生は話す内容よりも、入室から退室までの態度や言葉遣いの方を重要視している」とかという具合にです。実は私が中学生の頃から同じように言われてきたので、もう50年近くになるでしょうか。実際、全国的に中学生が荒れていた時期には本当にこんなことが行われていたはずです。また、過去には私学に人気が殺到して簡単に合格できない時期もあったりしたので、受験の日には私立高校の先生方が街角に立っているということを中学生たちは今も信じているはずですよ。(それでいいです・笑)

生徒数が大幅に減少し、一部の人気校を除いては公立私立を問わず生徒の獲得が難しい時代になってきました。そこで、特に私立校においては、生徒やその保護者に対しては極めて丁寧に接していると思います。オープン・スクールの際や私学フェアやフェスタの際はもちろん、入学試験の当日も決して例外ではありません。むしろ、『ここまで綿密に計画を立てたり、ここまで丁寧に対応したりしているのか』と感心させられたくらいです。中学校の先生と話す機会があれば、私立学校の教職員が入試の日を迎えるにあたって如何に綿密に計画し、丁寧に実践しているのかを語ってみたいと思うくらいです。彼らの方にもきっと学ぶべきところがあるとも思います。

今週末には、1.5次の入学試験と先日の試験日に体調を崩して受験できなかった子たちを対象とした追試験があります。やって来る受験生はわずかですが、これで今年度の高校入試に一区切りがつくことになります。今回の試験で、私は面接試験を担当しました。すべての受験生たちと接した訳ではありませんが、既にその子たちを迎えるのがとても楽しみになっています。

受験生たち(もはや新生たちでしょうか)は、本校に入学するにあたってちょっぴりの不安と大きな期待をもっていることだと思います。また、入学後には本校生徒としての自覚と責任をもって高校生活を送ってほしいとも思います。一方、彼女たちを迎える私たち教職員の方は、彼女たちの不安をやわらげ期待に応えるとともに、彼女たちを守り、社会で生きていく力を育てるという強い自覚と責任とを待つ必要があります。高校入試を終えた今、そんな決意を新たにしているところです。



2024. 2. 10. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『平常心で』

今日は本校高等部の入学試験です。この時期は一年で一番寒く、大雪に見舞われた年もありました。今日は素晴らしい天候に恵まれました。

午前 8 時前から受験生たちがやってきました。本校の教職員も 7 時半頃から待機していました。一番早くやってきた生徒は 7 時 40 分だったそうです。私も校門に立って受験生たちを迎えました。



「おはようございます！」と彼女らより先に声をかけ、合わせて「落ち着いて取り組んでください」とか「頑張ってください」と付け加えました。彼女たちの方も、緊張はしながらも笑顔で答えてくれました。

やってくる生徒たちを見ていると、現在の本校生徒と雰囲気似ていることに気づきます。これまで何度もオープン・スクールやフェスタ・フェアに参加し、本校のことをよく知っている子たちが受験してくれているのだろうと実感しました。そして、その子たちが、春には本校の制服を着て登校する姿を想像していました。

さて、昨日は 5 時間で授業を終了し、その後は今日の入試に向けて大掃除を行いました。生徒たちは、自分たちも過去に経験したことがあるだけに『気持ちよく受験させてあげたい』という思いで掃除に精を出していました。その様子を見ていると、“やらされている”という感じよりも、むしろこのことを一つのイベントとして楽しんでいるようにも見えました。もちろん先生方の指導があつてのことだとは思いますが、それでもその様子は私にとっては何とも言えず嬉しいものでした。

一方、中学校にとってもこの日は一年の中で特に大切な日の一つです。前日である昨日は、どの学校でも 6 時間目に激励会を開いて受験生たちを励ましています。ほとんどの学校では校長先生が激励の話をした後で進路指導主事の先生が最後の注意をします。私はこの時の生徒の真剣な眼差しが大好きでした。不安の中に意気込みが感じられる目です。普段は落ち着かない生徒も、この時ばかりはしっかりと顔をあげて話を聴きます。またヤンチャな生徒ほどビクついていることがあるのも愉快です。大人になっていく過程で、これ以上の経験を幾つもするはずですが、この時はまだ知りません。だから、彼ら彼女らは『人生を掛ける』くらいの気持ちでいるはずです。

進路指導主事は生徒に緊張感を持たせるために、「高校の先生はバス停や駅のホームにもいて様子を見ている」と言うことが少なくありません。本校の場合はまさに校門の前にバス停があるのでこの通りの状況になっています。そして、ほとんどの校長先生は次のように言って励ますものです。「本来の実力を出しければ大丈夫。だから平常心をもって臨んでください。」

今年はそうした受験生を迎える側ですが、まったく同じ言葉を今この時も各教室で答案用紙に向かっている子たちに言いたいです。「平常心で頑張ってください！」と。

2024. 2. 1. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『シンガポールという国』

Dear Linda

This is Sawada , a principal of Kyoto KOKA junior Hight School .

Thank you for your kindness and tenderness , when we went to your school .I am surprised at your students . She are very wise and politely and very very positive . And we enjoyed school trip of Singapore , after visiting your school . I think that I want to live in Singapore with my family for 3~5 years . In this country , many people live to get own dreems . I feel that the country is very enegetic and powerful . If you will come to Kyoto Japan , please come to my school . I will welcome greatly with my students . Sincerely yours .

Dear Principal Sawada

Thank you for your kind words about Singapore and our students.

I am glad that the school experience is positive for you and your students.

It was also a good learning experience for my staff and students. We look forward to further opportunities to collaborate and enhance the learning for our students. Do keep in touch and let me know should you next visit Singapore. Best Regards,

中3の修学旅行で訪れたシンガポール・チャイニーズ・ガールズ・スクールのリнда・チャン校長先生とのやり取りです。帰国後に御礼のメールを送ったところすぐに返信されてきました。前号に『自分の子どもを数年間この学校で学ばせたい!』と書きましたが、その理由をもう少し詳しく綴りたいと思います。

何といっても、学校でのすべての授業が生徒主体で進行することです。先生は舵取り役に徹し、生徒が自ら意欲的に内容を深めていきます。受け身でない分、学習内容の吸収率がすこぶる高いように感じました。そして、何よりも多くの人種や民族が共存しており、互いをレスペクトし合っているようにも感じました。欧米に暮らす日本人の多くが差別や偏見を感じるというのに比べると、ずっと伸び伸びと生活できるのではないかと思います。生徒が現地の大学生と国内の自由行動をしている間に一人で街を歩いたのですが、国民の日常生活に触れる中でこのことを一層強く感じたところです。

シンガポールは、次々と「目標を定めてその実現に向けて取り組む」という形で国づくりを進めてきた国です。それが成功を収め、わずか200年程で経済や文化、教育や環境が世界のトップレベルになるまで成長を遂げました。日々の生活に追われる毎日を送っている私たちですが、国・街づくりに限らず、学校経営についてもこの国のやり方を見習わなければならないと思っています。



2024. 1. 27. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『持ち前の』

昨日、中学3年生との修学旅行から帰りました。行先はシンガポールです。向こうは熱帯雨林気候の常夏の国で、少々ジメジメしてはいますがこの時期の気温は30度近くで、関西空港に着いたとたん、日本の寒さに震えました。

さて、中学校の修学旅行も現地の学校との交流をメインに据えて計画しました。今回の交流先の学校は、SINGAPORE CHINESE GIRL'S SCHOOL（通称 SCGS）と言います。シンガポールの街中でよく目にする明るいパステルカラーとレリーフ調の美しい装飾のタイルが調和したプラナカン（PERANAKAN と表記）文化を象徴するような建物が印象的な創立125年になる伝統ある女子校です。現地のガイドさんによると、ここに通う生徒はみな裕福な家庭に育ち、学力的にも大変優秀であるということです。

因みに、プラナカンとは東南アジアに移住した主に貿易商人であった中国人が現地のマレー人女性との間に設けた子どもの子孫のことです。当時からお金持ちの家が多く、気位も高くて独自の文化を築き上げていったということです。この学校もプラナカンが創立者で、シンガポールで初の女性大統領もこの学校の卒業生だということです。（彼女はインド系の父親とマレー系の母親との間の子どもです）

シンガポールの子どもたちは日常的に英語で会話しており、当然のことですが学校の授業も英語で進められます。そんな授業を本校の生徒たちも午前中から3時間一緒に受講しました。私が参観した最初の授業は社会科で、第1次世界大戦の頃の歴史を生徒がプレゼンテーションしていました。一つの発表が終わる毎に先生が質問を求めます。すかさず誰かが挙手して気の利いた質問をしていました。授業で話されている内容のレベルは高く、毎時間このような授業を行っているとするならば驚き以外ありませんでした。その後は、美術と理科の授業を参観しましたが、どちらの授業も生徒は主体的・積極的に授業に参加し、先生に導かれながら自分でどんどん学習を深めていました。単純に『自分の子どもを数年間この学校で学ばせたい！』と感じたほどです。授業に参加した本校の生徒たちがどの程度理解したかは分かりませんが、驚きを隠せないようなあの時のボカンとした表情は今も強く印象に残っています。

うちの生徒が“らしさ”を発揮したのは校舎案内と部活動の時間です。タータントラックを見つけると早速向こうの生徒と競争したり、ダンスやスカッシュでは気持ちよさそうな汗を流したりしていました。学校に到着する直前、私は生徒に次のように言いました。「君たちのよさは明るく元気なところと態度のよさ、それを前面に出して交流すれば大丈夫！」生徒たちは見事にやり切ったと思っています。



2024. 1. 19. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『ともに』

1995年1月17日、午前5時46分、淡路島北部を震源とした「阪神淡路大震災」が起きました。もう29年前のことで、本校教員の中にもこの地震以後に生まれた者もいます。あの時、私は隣の部屋で寝ていた上の息子と妻の様子を見に飛び起きました。当時、妻のお腹の中には下の息子がいたのですが、その妻が四つん這いになって上の息子を守っている様子を見て「母の偉大さ」を思い知ったものです。妻は私より6歳年下で、それまでは若さからくる“頼りなさ”を感じたことがあっただけに、この時の光景は、私の目には大いに頼もしく逞しく映ったものでした。その年の9月に下の息子が生まれたので、「阪神淡路大震災の発生から〇〇年目」という報道を聞くたびに、下の子の年齢を再認識させられています。



今年、神戸市中央区の公園に、ろうそくの灯りで「ともに」の文字が作られたとニュースで度々報道されていました。元旦に起こった能登半島地震を意識してのことであることは容易に想像できます。それにしても、寒い時期で、被災された人々は厳しい生活を送っておられることでしょう。現地の状況や被災された方々へ思いを馳せ、自分たちのできること・しなければならないことを見つめ直さなければなりません。

さて、来週から中学3年生がシンガポールに向けて修学旅行に出ます。今回も現地の中学生との交流が計画されていますが、そこでの活動を考えるとワクワクよりもドキドキの方が大きいです。今回の訪問は午前9時から午後5時30分までと長丁場です。本校の中学生は現地の生徒と“ともに”様々な授業を受け、昼食を“ともに”し、放課後は部活動まで“ともに”することになっています。果たして、生徒たちはちゃんとコミュニケーションをとることができるのでしょうか。

OECD が15歳児を対象に進めている PISA (Programme for International Student Assessment) 調査があります。最近あまり聞かれなくなりましたが、一時期、その日本の順位が低下してきていると騒がれました。一方、その順位で常に上位に位置している国として注目を集めているのがシンガポールです。英語に力を入れているということも聞くので、向こうの中学生の英語力にも驚かされることでしょう。

本校の生徒たちは、多少英語が苦手でも、持ち前の明るさとエネルギーをもって言葉の壁を越え、本校生徒のよさを発揮して楽しく活動してくれると期待しています。

国は異なっても、同じ中学生ですし同じ女生徒です。“ともに”活動することで学び合えることが無限にあると信じています。そして、目の前の修学旅行に全力を尽くすことが今の私たちにできることですし、しなければならいことだとも思っています。

この修学旅行を通じて、彼女たちが様々な新たな発見をし、自分たちを見つめ直して、また一つ成長してくれることを大いに期待しています。

2024. 1. 13. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『懐かしや、共通一次試験』

今日は本校の中学入試日です。初めて入学試験で“迎える側”を経験することになりました。数ある私立中学校の中から本校を選んでくれた受験生たちに気持ちよく力を発揮してもらえるように環境を整えるのは勿論のこと、教職員全員が緊張感をもって臨みたいと思っています。開門の7時30分から次々と受験生たちが保護者の方と共にやってきました。『試験の開始は8時30分なので、1時間も前から開門しなくても…』と言ったのですが、例年の状況からそのようにしているのだそうです。本校教職員も早い人は6時30分には出勤して準備に当たってくれていました。



私は面接試験を担当しました。どの子もしっかりと準備をしてきたようで、滞ることなく本当に上手に答えます。中には『この面接は“高校入試の面接だったっけ！？』と思わせられるような受け答えをした小学生もいて驚きました。この子たち全員と入学式で再開できることを楽しみに願っています。

一方で、高校3年生にとっては、とても大切な「大学入学共通テスト」の日でもあります。本校からの受験者は20人ほどで、決して多くはありませんが、ぜひ皆さんには頑張って実力を発揮してほしいです。試験会場がたまたま光華女子学園なので、他の学校の生徒に比べると多少は有利なのかもしれません。

試験会場である大学側の校門には本校教員が2人、寒い中を受験生の点呼と励ましのために早朝より立って来ていました。点呼を終えた受験生が一言二言先生たちと話をした後、笑顔で手を振って会場へと入っていく姿を見ていて、“頑張れよ”という生徒への思いと“ありがとう”という教員への思いを同時に持ちました。

また、昨日の6時間目には今日に向けて激励会を持ちました。高3生たちの真剣な眼差しを受け止めながら話しました。そういえば、私の頃は“共通通1次試験”というのがありました。これが現行の共通テストの“走り”です。当時は国公立大学を受験するための1次試験でした。5教科7科目のテストで、国・数・英が200点、理科2科目・社会科2科目が夫々100点の計1000点満点のテストだったと記憶しています。私は理科では生物と化学を、社会では世界史と地理を選択しました。

その後、教科数や選択の仕方、或いは私立大学が参入するなど、内容は度々変化して現在に至っています。ただ、実施の時期だけは変わっていません。毎年この時期になると40年以上前のこのテストのことを思い出しています。間違いなく言えるのは、自分の人生においてあんなに勉強したことは後にも先にもないということ。そして、あの時に勉強したことが今もいろいろな場面で役に立っているということです。

つつい若い頃の事を綴ってしまいました。今の子どもたちには、今この瞬間のテストに全力を発揮してほしいと思います。がんばれ、受験生たち！！

2024. 1. 6. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『新しい年の幕開け』

明けましておめでとうございます。

元旦の夕刻に発生した能登半島地震のことを考えると、なかなか「おめでとうございます」とは言いにくい部分はあるのですが、お亡くなりになっ



た方々に対するお悔やみの気持ちと被災された人たちへのお見舞いの気持ちとを持ちつつ敢えてご挨拶申し上げました。今年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

さて、次の文章は今日の始業式で生徒に対して話した冒頭の内容です。保護者の皆様方にも知って頂きたく、そして生徒諸君にはもう一度考えてほしくて書きました。

1月4日、中学3年の生徒一人の面接を行いました。内部進学を考えている生徒なので、時期はズレましたが他の中3生と同様に実施しました。この生徒は、約1年間に渡って入院し闘病生活を送っていました。この度、めでたく退院できることになり3学期の始業式、つまり今日から登校しています。

彼女は面接の始まりからずっと泣いていました。そこで、私は次のように尋ねました。「差し支えなかったら、あなたのその涙の意味を教えてください。」すると、彼女は次のように答えたのです。「久しぶりに学校へ来て、こうして学校に通えることが嬉しくて…」そう言ってまた言葉を詰まらせました。

なんて素敵な言葉でしょう。学校や教育の原点を思い出された気がして胸が熱くなり、涙を堪えるのに苦労しました。面接は続きます。「高校へ行って頑張りたいことは何ですか。」「勉強の遅れを取り戻すことと、出来ればまた陸上をやりたいです。」「無理をしないようにして、自分のペースで進んでいってください。私たち教職員もしっかりと応援します。もちろん、学年の生徒たちも見守り応援してくれると思います。」

『なんで、勉強なんてしなアカンねん!』『学校なんて、毎日、だるいだけやん…』ひょっとしたら皆さんの中には、そんな風に思っている人がいるのかもしれませんが。

先にあげた能登半島地震の被災地でも、おそらく中学生や高校生は当分の間は学校に行くことができないと思います。そんなことを考えると、“学校に通う”という何でもない「当たり前」のことが、実は「当たり前」ではないと気づけたりもします。

あなたは「今の状況や環境に甘えてはいませんか。」「努力を怠り、自分自身の可能性を狭めてはいませんか。」3学期の初め、また、新しい年の初めに当たって、この中学3年生の発言や能登半島地震の被災地に暮らす中高生たちのことを考えながら、是非今一度、自分の生活や生き方を見つめ直してみたいと思います。

私の話を聞きながら涙を流している生徒たちがいました。これも美しい涙でした。

『自分自身を見つめ直してみよう』と決意していることが見てとれました。

皆さん、あなたが今しなければならぬことは何ですか。それを今一度しっかりと見極め、自信と信念をもってそのことに向き合い行動を起こしてください。

2023. 12. 18. (MON).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『2学期を終えて』

16日、1時間目に終業式を行い、2学期を終了しました。今学期においても、課題がなかったわけではありませんが、概ね良好に学期を終えることができたように思います。

2学期は、暑い夏に始まり、過ごしやすい短い秋を経て冬になるまで続く3つの学期の中でも一番長い期間です。そして、今学期には「おおきに祭（文化祭）」や「Move！（体育祭）」、生徒会総選挙や高校2年生の研究旅行の他、運動部活動での新人戦や中学校や高等学校の総合文化祭もあり、学習以外の面でも大いに成長できる機会が盛りだくさんです。また、高校3年生の中には推薦入学等での大学進学に向けて取り組み、既に合格を決めている人も少なからずいます。生徒たちは、これらのすべてに真摯に向き合い、全力で取り組むことによって、将に頭も身体も、そして心也大いに成長させてくれたと思っています。

印象に残っていることをいくつか紹介したいと思います。

まずは学校全体がお祭りムードになった「おおきに祭」です。この行事を通じて、生徒のことをより深く知ることができました。意外な生徒がダンスが上手だったり大人しそうに思っていた子が陽気に歌ったり演技したりと驚きの連続で、精神がとても疲れたのを思い出します。次に「Move！」です。この日は一日中興奮のし通しでした。女子ばかりの運動会を経験したことがなかったけれど、こんなにも活発に、そして躍動的に活動できることに感激しました。特に高校3年生の創作ダンスは圧巻でした。あの発表をみて次の子たちが育っていくのだということも分かりました。そして、高校2年生の研修旅行です。初めて会話する生徒も多く、それがきっかけでよい関係を結ぶことができました。3か所どの方面の旅行も楽しく思い出深いものになりました。台湾旅行でいえば、『毎回毎回、よくあんなにたくさんの料理を食べられたものだ』と半ば呆れながら驚いて観ていました。私自身も胃袋を大きくして帰ってきて、暫くはすぐにお腹が減って困りました。部活動では、陸上部やソフトテニス部をはじめ、初めてフィギュアスケートの大会も訪れ、本校生徒の大活躍を目の当たりにしました。特に研修旅行中に届いた中学校陸上部の駅伝チームが近畿大会で優勝したというニュースには飛び上がって喜んだ次第です。青年の主張や弁論大会も観に行き、本校生徒の大活躍を観ました。また、京都府高等学校総合文化祭では茶道部・箏曲部・和太鼓部が優秀校として表彰されました。高校3年生の進学状況に一喜一憂もしました。いえ、まだまだこれから頑張ってもらわなければならない人たちも少なくありません。まずは来年1月の「共通テスト」に向けて万端の準備を整えてほしいところです。

あー、書き出したらきりがありません。上手くいったこともそうでなかったことも、人生に意味のないことなどありません。この経験を今後活かしてほしいものです。



2023. 12. 9. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『研修旅行のもたらしたものの』

7日（木）に台湾組が、8日（金）に北海道組の高校2年生が研修旅行から戻りました。便利な時代になったものです。旅行中の生徒の様子は写真を通じてですが既に学校HP にアップされていたので保護者の方や学校に残っていた教職員も知ることができました。しかし、写真では伝わりにくいこともあると思うので文章にして紹介することにします。ただ、私は台湾への旅行に同行したので、話題はそこでのものになることをご了解ください。



故宮博物院の宝物の数々、中世記念堂の荘厳さ、九分の情緒、**台南女子高校を去る際に**日月潭の美しさなど、いくつもの忘れられない貴重な思い出がある中で、この紙面に是非とも記しておきたいことが2つあります。

1つ目は、たくさんの生徒と初めて話したことです。どうしても分かりませんが、高校2年生と話す機会がこれまであまりありませんでした。顔は見知っていても、話さないことにはその子のことがよく分からないままです。実は相手も同様で、“校長先生” だということは分かっていますが、気づいてくれない部分がおそらくたくさんあったのだと思います。多くの生徒と話すことでお互いの気心が知れ、今後校内で出会ったときなどの関係が大きく変化するだろうことを楽しみにしています。

2つ目は、国立台南女子高級学校との交流についてです。知らない人たちとの交流ということで、生徒たちはもちろん教職員も大いに緊張して臨みました。私など、グリーティング・セレモニーであいさつをしなければならなかったのでメッチャ緊張していました。向こうの校長先生に続いて私の挨拶です。予め英語で話すことを決めていましたが、校長先生が台湾語で話され、私の英語の拙さがバレることはないと思って一安心しました。実はその前の晩、ホテルで一人のダンスの得意な生徒と話しているとき思い着いたことがあります。この旅行を通じて、もう一人ダンスの上手な生徒がいることを知ったのですが、『普段は接点のない2人で踊らせてやろう！』と。この企みは我ながら面白いなと思った次の瞬間、何とその生徒が現れたのです。すぐに計画を明かして協力を依頼したところ、たった15分でダンスを完成させました。

さて本番です。私のありきたりな挨拶が終わった後、2人が息ぴったりのダンスを披露してくれ会場は大いに盛り上がりました。英語の拙さもバレず、光華の人間の緊張感も完全にほぐれました。その後は物凄い歓待ぶりで、あっという間に時間が過ぎた気がしました。若い高校生のことです。上の写真の通り、帰る際にはお互いにアドレスの交換をしたり記念写真に納まったりと、充実した2時間半の滞在を終えました。

生徒たちにとって、いえ人間にとって何より大切なのは人との関係であると、今改めて感じているところです。一つの出会いが人生を変えることもあります。友情や信頼など、人間関係こそが宝物であると、研修旅行を通じて実感しているところです。

2023. 12. 1. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『いざ、研修旅行へ Go!』

うちの高等学校の研修旅行はこの時期に2年生を対象として実施されています。長く海外への旅行が行われてきましたが、新型コロナウイルスの影響で国内旅行に変更されてきた経緯があります。今年も、当初は北海道への旅行として計画が進められてきました。しかし、今年5月8日に新型コロナ感染症の感染症上の位置づけが5類に引き下げられたことで、北海道と同じくらいの料金で行ける海外へのプランを計画し直しました。(これまで積み立ててきた金額の範囲で行けるところということが大きな理由の一つです。)



台南女子高等学校とはかねてから交流があったこともあって、その学校への訪問と生徒との交流を中心に据えたプランを新たに加えました。改めて希望をとり直したところ、約120名の生徒のうち約70名が台湾へと方面を変更しました。一方、北海道への旅行を楽しみにしていた生徒も少なくなく、約50人は元々の計画通り出発することになりました。出発日は若干異なりますが、その研修旅行がはいよいよ明後日(12月3日)から始まります。今、高校2年生たちはワクワクしているでしょうね。

確かに海外旅行は魅力があるように思います。しかし、生徒たちにとっては、友達と一緒に数日間旅行するということが重要であって、方面はそれほど関係がないのかもしれない。かつて、中学校に勤めていた頃、行先方面の希望調査を実施したところ、沖縄と東京との間にほとんど差がなかったことがありました。もちろん教師の方は圧倒的に沖縄に人気が集まっていたのです。その時もおなじように感じたことを今思い出しました。

台湾であれ北海道であれ、この研修旅行をクラスや学年の仲間、そして先生方と思いきり楽しんで、一生の思い出にしてほしいと思います。実は、方面の見直しを考えた際、同時に内容の見直しも行いました。コロナ禍にあった際には、屋内での学習会がメインに据えられていました。もちろん、研修旅行ですから学習も大事です。しかし、せっかく簡単には行けないところまで行くのですからできるだけ多くの名所観光を取り入れました。京都に居てはできない体験や、見ることのできない景色や建造物を観て、触れてきてほしいと思います。また、旅行先での人との出会いを大切にしたいとも思います。出会いは宝物になることがあります。修学旅行で行った先で出会った人と、その後も交流が続いて何年か先にまたそこを訪れたという話も珍しくはありません。こうした経験はきっとこれからの人生に大いに役立つことでしょう。

底抜けに明るいあなたたちです。多少の言葉や文化の壁なんて平気で乗り越えられるだろうと思います。一方は寒い北海道、もう一方は温かい台湾。帰ってきたときに、旅先での思い出話と自慢話で盛り上がることを楽しみにしています。

2023. 11. 21. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『研究発表会を終えて』

7月7日付けのこのエッセイで「研究発表会」のことに触れています。研究授業の授業者を決めている最中であることから書き初めて、研究授業に対する私の考えを綴っています。あの当時は研究発表会本番を“遠い先のこと”と捉えていましたが、なんと、あれからあっという間に4か月が過ぎ、先週の金曜日にそれが終わりました。



中学校高等学校は5つの研究授業をしました。

高校宗教の授業の様子

中学校英語・中学校国語・高校社会・高校英語・高校宗教です。どの授業も生徒がよく動き、とてもよい授業になったと思います。今回は「対話」に力点を置き、「主体的・対話的で深い学び」の追求と表現力の育成に力を入れて取り組んできましたが、当日、生徒は人の意見をよく聴き、自分の考えを上手く伝えていました。これまで京都市内の中学校で一緒に働いたことのある先生方に声をかけ、当日の授業を観に来てもらっていたのですが、彼らは一様に高い評価をしてくれました。とりわけ、高校生が話し合いを活発に進めているのを観て驚いたようです。中でも高校2年の国際挑戦科の生徒たちがオールイングリッシュで話し合いを進行している様子は圧巻だったようです。一人は開口一番次のように言いました。「やっぱり私学に通う生徒は違うなあ。」

授業に向かう生徒たちの落ち着いた様子、指示に従って動く様子と言われた以上のことを行う様子、つまり主体的に学習する様子、仲間の前で堂々と自分の考えを伝える様子、仲間の声を共感的に聴き、発表を称える様子など、観てほしいところにしっかりと気付いてくれていました。来てくれた彼ら彼女らは、勤務した学校こそ違えど研究発表で学校を作ってきたときのメンバーたちで、授業を観る目は確かです。忸度なく辛辣な意見を述べることもあるだけに、今日の研究授業に向けて取り組んできたことが、彼らに評価されて良かったと思っています。保護者の方も参観に来られていましたが、授業の様子に感心されていると同時に驚かれているようでした。

「校長先生、こんなふうに授業をしているなんて思ってもいませんでした。楽しそうに授業に取り組んでくれていて安心しました。」ある保護者の方から頂いた感想です。

授業を引き受けてくれた先生方、居残って授業を受けてくれた生徒の皆さん、本当にお疲れ様でした。そして、有難うございました。皆さんのおかげで京都光華中学校高等学校の株が上がったと思います。私はこの研究授業を観て、本校に通う生徒たちとそこに勤務する教職員を一層愛おしく思いました。一方、今年一番の反省は、この様子をもっと多くの皆さんに知って頂くための働きかけが少なかったことです。反省は来年に活かしていきます。そして、もっともっと素晴らしい学校、多くの人から『通いたい!』と思ってもらえる学校にしていきたいと心からそう思います。

2023. 11. 16. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『歯を食いしばって』

角川の国語辞典で「歯を食いしばる」と引くと、「無念さ、いかり、苦痛などをこらえる様子」と書かれています。12日、中学校陸上競技駅伝競走京都府大会の応援に行きました。惜しくも2位と、目標としていた優勝には届きませんでした。生徒たちは素晴らしい成績を残してくれました。一時は1位に並ぶ場面もあっただけに、少々悔しい思いと残念な気持ちもありますが、彼女らは持てる全力を発揮してくれました。

子どもたちが走る姿を見て、久しぶりに“歯を食いしばって”頑張る若者の姿を見た思いがしました。前を走る選手を追いかける時、それでなくても苦しいのに、『行ける！よし、追いついてやる！』『息が苦しい。脚が動かへん。もうアカン。』などと思いつつも走り続ける時間は、それはそれはしんどいことでしょう。レベルの差はあるものの、誰でも一度はこの経験をしたことがあると思います。『少しでも前へ！』『1秒でも早く！』と、タスキに仲間の思いを感じながら走り続けたのだと思います。その姿と表情に大きく心を動かされました。アンカーのゴール後、選手が集まります。お互いの走りを褒め、頑張りを称え合います。それぞれが全力を出し切ったことを認め合います。涙を流す選手がほとんどです。試合後、選手たちの前でコメントを求められました。

「君たちの頑張る姿に、一生懸命走る姿に感動した！」そう言った瞬間です。私をまっすぐに見つめる選手たちの目から流れる満足感・充実感・安堵感からくる美しい涙が私の目に映りました。思わず私の感情も乱れ、声が詰まり思いもかけず涙が頬を伝いました。感涙しながら生徒の前で話をしたのは本当に久しぶりでした。

いつ頃からか、教育界で「がんばる」という言葉が使われにくくなりました。その言葉で子どもを追いつめることがあってはならないということがその主な理由です。ましてや“歯を食いしばって頑張れ！”などと言うのはもってのほかだと言われそうです。一方で、頑張らせること、一生懸命に取り組ませること、力を出し切らせることの意義は今も昔も変わらずあると思うのです。また、この言葉はスポーツで使われることが多いようですが、勉強や人間関係のうえでも同じように使うことがあると思います。とりわけ社会に出てからは、上手くいかないことで、仕事を替えたいと思ったり人生そのものが嫌になったりすることがあるかもしれません。そしてそんなとき、“歯を食いしばって”踏ん張る、耐えることが必要になるかもしれません。

先日の駅伝では、“歯を食いしばって”頑張ったからこそ得た満足感を、選手の美しい涙から見とりました。確かに単なる「根性論」で指導することに対しては賛成できません。しかし、目の前の生徒たちに対して、“ここぞ！”という時には「歯を食いしばってがんばれ！」と激励することがあってもよいと再認識したところです。



2023. 11. 10. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『報恩講』

報恩講とは、宗祖親鸞聖人のご命日である11月28日に聖人を忍んで勤める法要のことです。生徒やその保護者の皆さんは、親鸞聖人がお開きになった浄土真宗の教えが本校教育の基礎となっていることを既にご承知のことだと思えます。そのため、毎年、報恩講は1年で最も大切な仏教行事として位置付けられ、幼稚園から大学院まで含めた光華女子学園を挙げて取り組んでいられています。



★写真は本山での報恩講の様子です★

今年度から本校でお世話になっている私にとっては初めての行事です。事前に要項が配布され、それを読み込む過程でもこの行事に掛ける学園関係者の意気込みを感じ、この行事の大切さを理解するとともに、その一員としての責任も感じてきました。

7日（火）の午後、「学園報恩講」が営まれました。美しい法衣に身を包んだ理事長はじめ僧籍をもつ学園教職員（本校の教頭先生もおられました）の読経が始まりました。代表児童生徒や学生による献灯と献花、学園関係者と代表生徒によるお焼香、児童生徒による合唱など、厳粛な中で行事が進行しました。とりわけ、小学生が大きな声で恩徳讃の合唱を始めたときには大きく心を動かされました。また、会の終盤に小学生から大学生までの代表者が行った「感話」は特に素晴らしかったと思っています。中学生の代表は「人と比べるのではなくて、過去の自分と比較する」ということについて、自身の具体的な体験をもとに話してくれました。また、高校生は大好きなお婆様を亡くした際に、感謝の言葉を伝えられなかったことを悔いながら、聴衆に対して大切なことはできるうちにやってほしいと訴えてくれました。いずれも聴く者に深い感銘を与えたものと確信しています。

合唱も、全員での三帰依文の復唱もとても素敵で、先日行われた Move！等の行事と併せ、こうした儀式的行事が児童生徒の心を豊かに育てるうえでたいへん重要であるということを再認識させられました。また、是非この様子を外部の人たちに観てほしいとも強く思ったところです。

9日（木）の午後には、中学2年生と高校2年生とが本山まで報恩講の参拝に行きました。こちらは更に荘厳な雰囲気の中で法要が取り行われました。広い御影堂に正座し、御仏壇に向かって手を合わせた瞬間に気持ちが切り替わったのは、おそらく私だけではなく、多くの生徒に共通の感覚だったのではないかと思います。

先日来、心の成長ということに焦点を当てて文章を書いています。学校では教科の力をつけることはもちろん大切です。しかし、学校という社会・集団の中でしか身に着けられないもの、それがこうした諸行事の中で「感動」を通して養われる力や考え方なのではないでしょうか。改めて学校行事の大切さを噛みしめています。

2023. 11. 4. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『心の成長 Move！より』

先月27日（金）に、一般的にいう体育大会（本校では“Move”）が終わりました。午後からの天候が危ぶまれましたが、進行を早めたり昼休みを短縮したりすることで何とか全プログラムを終了することができました。本校生徒は現在450人ほどいますが、来校された保護者の方は350人を越え、ご来賓の方々を加えると400人近い皆様方に生徒の現在の生の様子を観て頂けたことをとても嬉しく思います。



さて、光華中学校高等学校は普段どのような見られ方をしているのでしょうか。伝統文化教育や礼儀マナーの指導に力を入れていることもあって、「生活指導の厳しいお堅い女子校」というイメージが強くあるのかもしれないと推察します。実際に、これまでのオープン・スクールや私学フェアで本校や本校のブースを訪ねてくれる生徒は見るからにまじめな中学生高校生が多いように思います。挨拶や言葉遣いがしっかりできること、服装などの校則を遵守できることなどは、社会に出てからも大いに役立つ重要な要素だと思いますし、それを大切にしていることは学校として誇るところではありますが、中学生高校生の子どもたちからすれば、残念ながら“お堅い”“古臭い”と捉えられてしまうのかもしれない。

仮にそんなイメージがあるとしても、「決してそんな部分だけではない！」と声を大きくして言いたいことがあります。それは本校生徒の中に“底抜けの明るさ”と“積極性”“創造性”があることです。普段の学校生活においても、生徒たちは授業中と休憩時間、所謂「ON」と「OFF」の切り替えを上手にしていると思って観ています。



そんな部分が最も顕著に表れたのが先日の“Move!”でした。“おおきに祭”の時も思いましたが、本校では高校生が中心となって行事を行うため、中学校の感覚からすると、随分と自由で開放的に感じます。クラスの仲間への応援はすごい盛り上がりですし、特に高校3年生の創作ダンスについては、その衣装や振付、演出の奇抜さには心底驚かされました。『高校生というのは、自分たちの力でここまで出来るのか！？』初めて観た私の率直な感想です。それも決してやり過ぎてはおらず、可愛らしさの感じられる内容には大いに好感をもちました。そして、この様子を多くの人に観てもらいたいとも思いました。本校に対するイメージを大きく転換できると思うからです。

また、何よりも強く感じたのは、生徒たちがこの行事を通して確実に心を成長させたということです。高校3年生は、いよいよ本格的に進路に向けての取組に突入していきます。この経験をエネルギーに替え、残り少ない高校生活を謳歌してほしいです。

2023. 10. 26. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『豊かな心を育む』

本校では毎週水曜日に「朝の礼拝」を行っています。4月に初めて実施した時には、教わった作法通りに行うことで気持ち一杯でしたが、夏ごろからその内容を深く感じるゆとりができてきました。生徒や教職員の感話はどれも興味深く、真宗宗歌や恩徳讃の斉唱、三帰依文の唱和も気持ちの良いものへと変化してきました。

進行を勤めてもらっている教頭先生が、会を閉めるにあたって毎回のよう「今日も一日、心豊かに…」と言われますが、まさに心が豊かになる感覚を覚えています。

さて、昨日は学期に一度の「講堂礼拝」が実施されました。生徒の代表による献花・献灯に続き、こちら生徒代表による三帰依文の唱和と恩徳讃の斉唱。とても厳かに会は進行了。講堂礼拝の時には講師の方に来ていただいて講話を聴きます。昨日の講師の方は、かつて本校の宗教科を担当していただいていた先生で、現在も京都市内でご住職としてご活躍されています。内容は名前についてお話しいただきました。ご自身の娘さんの名前を例に挙げて、名前に込めた親の思いを時にはユーモアを交えながら分かりやすく話してくださいました。生徒たちも、自分の名前の由来について改めて考えたことだと思います。講堂からの帰り、一緒になった高校生に「校長先生の名前にはどんな意味があるのですか」と尋ねられました。両親が込めた思いや願いを伝えましたが、小学生の頃は自分の名前が気に入らず、人前と言うのが嫌だった思い出も語りました。「えっ、どうしてですか。先生の清人って名前、とってもカッコいいじゃないですか。」生徒からそんな風に言ってもらって、60歳を越えてから自分の名前に誇りをもてたように感じました。

ところで、明日は待ちに待った「Move!」です。今もグラウンドでは3年生がダンスの練習を繰り返しています。4月から取り組んできたものだけに気持ちの込めようもすごいです。また、学級の個性がその内容に見事に反映しているようにも思います。振付や曲も自分たちだけで考えてきたと聞きます。今日にいたるまでにはクラスの仲間とのトラブルや上手く進まない時期もあったことでしょう。それを乗り越えて披露するのですから、後輩たちや教職員が楽しみにしているのも当然だと思います。また、リレーをはじめとした各競技も熱心に練習を繰り返しています。リレーに勝利し飛び上がって喜んで様を見るにつけ、まさに豊かな心を育む取組がここにあると思っています。

明日は天気が少々心配ではありますが、グラウンドが笑顔と歓声に包まれることと思います。そして、生徒たちの心が一層豊かになることを大いに期待しています。



2023. 10. 21. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『不易と流行』

校長室の会議テーブルに一輪挿しをおいています。玄関付近の草花を切ってきては定期的に挿しているのですが、今回のそれはなかなか萎れません。不思議に思ってよく見てみると、何と茎からたくさんの根が生えて、ちょうど水栽培のようになっていました。小さな植物から生物の逞しさを知った思いがしています。



さて、不易と流行という言葉があります。「不易」とはいつまでも変わらないことで、「流行」とは時代に応じて変化することです。

実はこれは、「不易流行」という四文字熟語として、松尾芭蕉が俳諧について唱えた言葉だそうです。確か高校生か大学生の頃に次のように学びました。

その理念は諸説あるが、「俳諧には不易と流行とがあるが、不易の中に流行を取り入れていくことが不易の本質である。また、そのようにして流行が永遠性を獲得したものが不易であるから、不易と流行は同一だと考えるのが俳諧の根幹なのだ。」何だかややこしいことになりましたが、多分そんなことだったと思います。

これを今の教育の現場、つまり今の学校に置き換えて考えてみます。

不易、つまり永遠に変わらないものとは“一人ひとりに居場所と活躍の場があり、みんなが楽しく学べること”“一人ひとりの個性と能力が尊重され、それを最大限に発揮できること”となるのでしょうか。いや待てよ。明治の初め、学校教育が始まった頃、これは不易ではなかったかもしれません。おそらく、児童生徒は背筋を伸ばして先生の話聞くことが是とされ、個性が尊重されることなどなかったのかもしれませんが。昭和の時代の流行を介して、当時の不易は確実に変化しているということです。

一方、今でいう流行とは“生きる力を育てること”“非認知能力を育てること”“主体的・対話的で深い学びを得させること”でしょうか。そういえば、「生きる力」という言葉が学習指導要領に登場して既に20年以上が経ちますが、すっかり教育の世界には不易になったように思います。そう考えると、「非認知能力」や「主体的・対話的で深い学び」もいずれは不易と呼ばれるようになるのでしょうかね。

今、本校では27日（金）のMove! に向けて学校全体が盛り上がっています。

グラウンドに出ると、中学生高校生たちが本当に楽しそうに走ったり踊ったりしています。その光景を見ながら、すべての生徒が集団の一員として尊重されていること、そうした雰囲気を守り育て保つことこそが究極の不易だと思うのです。



有名大学を目指して勉強を頑張る人、部活動で全国優勝を狙う人、とにかく学校生活を楽しむ人、夫々の個性と能力を最大限に引き出し伸ばす。そして、夫々の人が互いに認められていること、そんな不易を実現したいと思うこの頃です。

2023. 10. 13. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『当たり前』

朝晩の気温がずいぶん低くなってきました。バイク通勤の私は、最近ではジャンパーを一枚着るだけでは足りず、中にセーターを着こみ下半身にはオーバーパンツをはくようになりました。つい先日まで「暑い、あつい！」と繰り返していたのが嘘のようです。本当に季節の移り変わりは早いものですね。

さて、今回は最近よく考えている「当たり前」について綴っておこうと思います。

生徒指導の厳しい学校に勤務していた頃、よく生徒に次のように言っていました。「当たり前でないことを当たり前のような顔をしてするな！」学校で平気でジュースを飲む、お菓子を食べる、すぐに廊下等にごみを捨てる、授業中に教室や校内を歩き回る、校内外で喫煙する etc、あげだしたらきりがなくいくらいです。一方、つい最近、教職員に伝えたのが次の内容です。「生徒に出会ったら笑顔であいさつを交わす、廊下にごみが落ちていたら拾う、授業中に眠たそうにしている生徒がいたら起こす、授業に集中できない生徒には注意を促す、様子の気になる生徒がいたら声をかけるなどの、当たり前のことを当たり前にやりましょう。」そんな当たり前のことを怠ると思ってもよらない大ごとになることがあるからです。

いじめが原因で自らの命を絶つ児童生徒がなくなりません。そんなことが起こるとTV等で記者会見の場面が放映されますが、「いじめらしきものはありませんでした。」などとコメントされると“えっ？”とってしまうのです。毎日生徒に接していたら必ず見えるものがあるはずだと思うからです。もし見えていないとしたら、それは教師失格だと思うほどです。当たり前の対処をしていれば、起こっていないことがおそらく幾つもあったのではないのでしょうか。しなければならぬ当たり前のことを見逃したり怠ったりすると、信頼を失ったり問題の解決を遅らせたりもします。

入試シーズンが近づいてきたこともあって、小中学校や学習塾の先生方に本校教育の特色を尋ねられることが多くなってきました。勉強や部活動など、夫々の能力を最大限に発揮させる学校だと言ってきましたが、それではあまりに普通過ぎて特色とまでは言えません。考えに考えても“売り”になるようなものを見出せません。そこで、「愚直なまでに当たり前のことを当たり前に実行する学校」と言うことにしました。

来校者や教職員に出会ったら明るく挨拶をする、校則を守る、礼儀やマナーを大切にするなど、すべての生徒にとっての当たり前を遵守させる。また、国公立大学や有名私立大学進学に向けて学習を頑張る、部活動で全国優勝を目指す、毎日きちんと登校するなど、生徒たちの異なる目標のすべてにしっかりと寄り添い、励まし、力を引き出し伸ばす、それが本校教職員の当たり前であり教育に携わる教師の当たり前です。本校教職員は愚直にそんな当たり前を実行することで徹底して生徒を大切にします。



2023. 10. 6. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『緊張感を感じながら』

今週は、京都市内の中学校が本校の講堂で合唱コンクールを行いました。早朝から多くの中学生を迎えましたが生徒たちが爽やかに挨拶をしてくれました。久しぶりに男子中学生の元気な挨拶や少々おどけた挨拶を受けもしましたが、それがとても懐かしい気がして、暫くはこちらの気分まで上がった状態になりました。



仕事の合間にコンクールの様子を観に行きました。中学校の校長先生はとても丁寧に挨拶をしてくれました。もちろん、私の方も丁寧に挨拶を返しました。私が京都市立中学校の校長時代にはまだ校長に成っていなかった人で、ともすれば相手の方が恐縮するような場面ですが、こちらは生徒を送ってもらわなければならない私立学校です。そのあたりのことは十分気を付けました（笑）。

さて、合唱コンクールの内容です。本校の合唱は、当然のことですが女子だけで構成されます。やはり、男声が入ると厚みが増すと改めて思いました。特に3年生になると、男子生徒の声が大人の男性のそれになるのでより合唱に重みが出ます。これまでもそう思ってきましたが、女子校に勤務してそれを一層強く感じたところです。

美しい声で歌う女生徒には自然と気持ちが向きました。一方で、一生懸命に歌う男子生徒たちに目が向きます。『普段はガサガサしているのだろうか』とか『先生を困らせることもあるんじゃないかな』と思える男子生徒も中にはいました。そんな彼らが緊張しながらも一生懸命に歌っています。初めて見た私でさえその部分に心が動かされました。ましてや、その子たちの普段の様子を知っている先生たちにとっては堪らない光景だろうと思います。かつて同じような経験をした者として、その先生方の気持ちは十分に分かるつもりです。

担任の先生の中には、前日はあまり眠れなかった人がきつといたと思います。かつての私がそうでした。『あの子はちゃんと歌えるだろうか』『あの子は舞台に上がれるのだろうか』『あの子が来なかったときにはどうするのか』『周りの子たちはあの子のことをちゃんとフォローしてくれるだろうか』『最後の練習の時に言った注意点を守って歌ってくれるだろうか』『緊張しすぎるな』『自信をもって歌え』『優勝したら、或いはダメだったらなんて声を掛けようか』等々、考えだしたらもうダメ、まったく眠れなくなってしまいます。でも、そんな頃を懐かしく思い出しました。

“緊張しながらも精一杯の力を発揮する” そんな場面は様々あると思います。運動部活動の試合はもちろん、文化部のコンクールや発表会もそうでしょう。また、一生懸命勉強してきた成果を試すテストに向かう際にも同じような気持ちになるはずです。

この緊張感を乗り越えて目標を達成したときに生徒は大きく成長を遂げます。だからこそ、学校では意識してこういう場面を作らなくてはいけないと思うのです。

2023. 9. 28. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『時々考えること その2』

公立中学校の教師を37年間務めました。また最後の11年間は校長として学校を任されもしてきました。仮に85～86歳まで生きられるとすると、おそらく人生の約半分を学校で生徒やその保護者と共に過ごしてきたということになります。

「(中学校の)先生はたいへんですね。」これまで何度もそう言われました。また、「ご苦労さん！」と労いの言葉をかけてもらうことも少なくなかったです。身体や心が疲れたことは確かにあります。

しかし、この仕事を“たいへん”と思ったことや“苦労”と感じたことはありません。

教師がブラックだという人達に、この仕事は金色・バラ色だと声高く言いたいです。

定年退職をして2年間教員養成に携わってきました。教師を目指す若者を育てることに對して遣り甲斐も感じてきました。しかし、物足りなさを感じていたのも事実です。『リタイヤするとはこういうことなんだ』と自分に言い聞かせ、『まだできる!』という気持ちを抑え込んできました。そんな折に本校へのオファーを頂きました。

「お父さんがやりたいのなら応援するよ」家族の声に後押しされて今ここに居ます。

初めて校長となった49歳の頃とは違います。身体には随分とガタがきています。今もグラウンドからリレーに沸く生徒たちの声が聞こえます。当時の私なら飛び入り参加でもして一緒に走っていたところですが、もうそんな気持ちにはなれません。一方で、様々な経験を積んできた分、生徒の周りで起こる事象への対処の仕方は当時とは比べものにならないほど上手く、そしてスムーズにできていると思えます。

「自己有用感」という言葉があります。これまでは生徒のことに使ってきましたが、一旦リタイヤを経験した今の自分にとっては、すこぶる大切な感情であると思っています。「自己有用感」と「自己肯定感」や「自尊感情」との一番の違いは、他人の役にたっていると思えるかどうかでしょう。今の職場において、生徒や保護者、教職員などから“校長先生”として認められ、頼りにされていると感じる場面は少なくありません。少々手前味噌で恐縮ですが、レスpektされていると感じることもあります。そして、この気持ちが今の私を支えてくれています。

このエッセイの第1号の最後に次のように書いています。「そのような中であっても変わらないもの、いえ、変えてはいけないものがあります。生徒を大切にする気持ちです。…略… その子たち一人ひとりを尊重し大切にしたいと最初の職員会議で教職員に伝えもしました。…略… これらすべての子たちを真に大切にしたいと思いますし、全教職員でしなければならないとも考えます。」

この学校から写真の中のような生徒の笑顔を絶やしてはなりません。いよいよ来年度の生徒募集が本格化する今、改めて上の文章を噛みしめています。



2023. 9. 22. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『時々考えること』

「3年B組金八先生」の第2シリーズ（全25話）の中に「腐ったミカンの方程式」というテーマの何話かがありました。中学生の「非行」や「校内暴力」を扱った作品です。武田鉄矢演じる金八先生のクラスに問題行動を重ねた少年“加藤”が転校してくるところからその物語



は始まります。“加藤”はクラスになじめない。教師反抗や器物破損を繰り返す。エスケープにバイク盗、万引きなどを重ねて警察に補導される。当時の多くの中学校に“加藤”のような生徒は少なからずおり、この問題に真正面から向き合った話題作です。

その当時は、日本中の中学校が荒れており、窓ガラスのない校舎や深夜に徘徊する少年の姿がTVに映し出されることが珍しくもなくなっていました。中学生や中学校の“荒れ”が社会問題化し、マスメディアでも頻繁に特集が組まれてもいました。そのようなとき、私は教師を目指す大学生でした。

そんな状況からなのか、小中高校の教師が主人公のドラマも多く放映されました。子どもの家庭にまで踏み込んだり、生徒同士や生徒と教師がぶつかりあいながらも絆を深めていったりするストーリーはどれも感動的で、教師は若者に人気の職業の一つになっていました。運よく教員採用試験に合格し中学校教師として勤めだしました。今とは違って、採用1年目から担任をするのは当たり前で、先輩方のやり方を観ながらの“ぶっつけ本番”の教師人生の始まりでした。私が初任で赴任した学校にも“ヤンチャ”が少なからず居ました。その学校の校舎はとても古く、初めて接した“ヤンチャ”たちの姿がそこに重なって、寒々とした第一印象は今も強く心に残っています。

補導問題の解決や学力補充のために深夜まで家庭訪問することは珍しくはなかったです。夜の8時頃から学年会がもたれたことが何度もありました。『生徒のために』と取り組んだ結果、卒業式の日“しんどさ”が“よろこび”に替わる経験もしました。

昨今、教師の働き方が見直され、遅くまで家庭訪問をすることは少なくなったと聞きます。部活動の時間が大幅に縮減され、勤務時間外で生徒と関わる場面は極端に少なくなりました。私たちの頃は…と昔のことをノスタルジックに語るつもりはありません。また、“ヤンチャ”たちと関わり続けたあんな時代が再来するとも思いませんし、来てほしいとも決して思いません。しかし、教育の世界から学習指導や生徒指導に注ぎ込む「熱」と「誇り」とを決してなくしてほしくはないのです。

教師がサラリーマン化し、私たちが感じたあの頃の“よろこび”を今の若い教師が感じられていないとしたら、それが教職のブラック化の原因の一つかもしれません。もしそうなら、それは日本の教育にとって、また、日本の社会にとっても大問題です。少々大げさな文章になってしまいましたが、最近そんなことをよく考えています。

2023. 9. 13. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『おおきに祭』

本校では文化祭のことを「おおきに祭」と呼びます。誰が名付けたのかは知りませんが、なかなか素敵なネーミングだと思います。保護者の方や



先生方、地域の方、そして何よりも共に学校生活を送る仲間に対して感謝の気持ちをもてるようにとの思いや願いが伝わってきます。

2日間の「おおきに祭」を通じて感じたことを綴っておきます。

一番感じたのは、生徒の楽しみ方の上手さです。教師としては中学校の文化祭しか知らなかったのも、それに比べるとかなり自由度が高いなと思いました。高校生が主流ということもあるでしょうが、中学校のそれとは楽しみ方が随分と違います。そう言えば、自分が高校生の時も“こんな”だったかなという記憶が蘇ってきます。（40年以上前の昭和の時代のことだから自由度はもっと高かったかもしれません。）

校内での食べ歩き、舞台と会場とを一体化したステージ発表の盛り上げ方、お揃いのTシャツに身を包んで（私たちの頃は法被でした）クラスの団結感を楽しむこと、この時とばかり先生との時間を楽しむこと、本当に楽しい空間と時間でした。

次に思ったのが、生徒の意外な一面の発見です。『この子、こんなにダンスがうまかったのか！』『普段は真面目に勉強している姿しか見ないのに、こんなにすごいパフォーマンスができるんや！』『美しい声で歌うなあ』『見事な演技力だ！』『こんなにオモロイことのできる子やったんや！』『えっ、こんなにリーダー性があったなんて？』いろいろな発見です。「おおきに祭」以来、見方が変わった生徒が何人もいます。

更に、教職員の子供を思う気持ちの強さです。生徒を主人公にするために、そして生徒を楽しませるために様々な努力と工夫もしていました。上の写真は教職員が吹奏楽部の演奏に合わせてパフォーマンスをする直前のものです。高校3年生が引退して初めての本番ということで、不安もあり何とか盛り上げたいということで生徒たちから依頼がありました。実は私も参加したのですが、この後、会場全体が揺れんばかりの拍手と手拍子、踊りと歓声に包まれたことはここに書くまでもありません。

最後に来年度に向けての要望を2つほど示しておきたいと思います。1つ目は、合唱や演劇、特に合唱にもっと力を入れてはどうでしょうか。上級生の美しいハーモニーから下級生が色々と学ぶことは学校ならではの取組です。もう一つは2日目のプログラムをうまく整理して舞台発表や模擬店の取組を全員が楽しめるようにできないかということです。とてもよい取組や発表があるのに全員が見られないのはもったいない気がします。是非ご検討ください。とにかく楽しい2日間でした。そして生徒が成長した場面でもありました。次は来月の「Move！（体育祭）」が大いに楽しみです。

2023. 9. 5. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『歓声』

グラウンドから歓声が聞こえてきます。はじめは小学生かと思っていましたが、どうも違うようです。カーテンの隙間から覗き見ると中学生がリレーをしていました。どうやら、来月のMove!（体育祭）に向けて本格的に練習が始まったようです。



リレーは、今も昔も体育大会の花形種目です。精一杯走る選手と精一杯応援する人たちの声が歓声となってグラウンドに響き渡ります。こういう声を聞き、雰囲気を感じると、自然と『学校っていいな』と思います。前回のこの通信の結びに「時にはぶつかり合いながらも集団の中で自分を見つけ、そんな自分を磨き続け、仲間と共に成長していくところ、それが学校ではないかと思う」と書きましたが、まさにその場面が目の前にありました。

誰かが走っているときには声が枯れんばかりに応援し、アンカーがゴールした瞬間に多くの人がグラウンドに倒れこむ様子を観て、学校教育のあるべき姿を思い出したように思いました。足が速かろうが遅かろうが、勉強が得意であろうが不得意であろうが、とにかく全力を尽くすこと、それができれば誰からも非難されることはありません。今日のリレーの場面では、いい加減な態度で走る人は一人もいませんでした。足の遅い人に対してもみんなが全力で応援し、その人が完走した際には多くの人がねぎらいの言葉をかけている姿を観た時には、本当に温かい気持ちになりました。

一方、決してそんな風になってほしくはないのですが、反対の場面も想定できます。足の遅い人に対して「あの子のせいで負けた!」と平気でそういう言葉を吐く。負けているからといって、いい加減な態度で臨んだり全力で走らない、こんな状況だとみんなが嫌な気持ちになります。同じこと（リレー）をしていてもちっとも楽しくありません。残念ながらこんな経験をしたことがある人もいないかと思います。

集団には、もっと言えば社会にはいろいろな人がいます。リレーでいえば足の速い人・遅い人となるでしょうが、様々な立場の人がいるということです。一人ひとりの個性を尊重し、互いの良いところに目を向けてレスpektし合えればとても良い集団（社会）に育っていくはずです。そして、そんな集団なら、嫌な思いをする人がなくなりますし、“いじめ”や“差別”が起こることもないはずです。

Move!（体育祭）の前には「おおきに祭（文化祭）」があります。その際にも、他学年の人も含めて仲間の取り組んでいることに理解と敬意を払い、互いに仲間を尊敬し合って鑑賞し、称え合いましょう。講堂で行われる舞台発表の際、誰一人白けることなく、今日のリレーの時のように、舞台上で演じている人に対して心からの声援を送りましょう。そうすれば、きっと講堂も愛に溢れた素敵な歓声に包まれると思います。

2023. 9. 1. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『学校というところ』

毎朝5時半には愛犬の散歩に出ます。今朝は、この夏初めて『あれっ、夜明けが遅くなったかな！？』と感じました。そう言えば、夕方少し早く暗くなるようにも思いますし、草むらからの“虫の声”も大きくなってきました。確実に季節は移っていると感じています。

さて、2学期が始まって1週間が経ちました。夏休み中も多くの生徒たちと会ってはいたのですが、授業中の子どもたちの様子を観たり、制服姿の子どもたちと接したりするようになって、改めて2学期が始まったことを実感しています。

中学校陸上部の4×100mRの全国制覇をはじめとして、この夏も生徒たちは各部で輝かしい成績を収めました。

このところ、学校の部活動について考えることが多くなっています。と言うのも、夏休みに“光華カップバレーボール大会”を催したことがあるのだと思います。

光華中学校にはバレーボール部がありません。これを作りたいとの思いから“光華カップ”を始めました。勿論、高等学校のバレー部顧問からの申し出でしたが、創部したい理由を聞くうちにその思いに納得し、賛同している自分がいることに気づきました。そして、それ以来、学校における部活動の役割や部活動を学校ですることの意義について、これまで以上に深く考えるようになっていきます。

学生をはじめとする若者たちに教師の世界がブラックだといわれるようになって久しいです。勤務時間の縮減を図って働き方改革が急速に進行もしています。特に、部活動の時間が大幅に縮減されつつある現実、社会の目が集中している課題でもあります。3年間続いたコロナ禍もこの動きに拍車をかけ、部活動のあり方が大きく様変わりしてしまいました。思いっきり活動したい子どもは学校を離れてクラブチームへ加入するようになり、熱心に指導してきた部活動顧問の中には“やる気”をそがれてしまった教師も出てきました。

この流れは一定理解しつつ、それでも、朝から一緒に学習し、休憩時間や昼食時には一緒に笑い合ったり、時には言い争ったりする仲間と共に部活動にも励むことは、その競技をすることだけのために集まった者たちとの活動に比べて、その意味は大きいと思うのです。また、「人を育てる」という意味からも、選手の学習面や日頃の生活の様子まで熟知している教師が部活動を指導することもまた重要だと思えるのです。

部活動の目的は「人間形成」あるいは「人格形成」であって、「京都で一番になること」などは目標です。言い換えれば、部活動を通して「素敵な人となる」ことが目的なのです。時にはぶつかり合いながらも集団の中で自分を見つけ、自分を磨き続け、仲間と共に成長していくところ、それが学校ではないかと思うのです。



2023. 8. 26. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『2学期の始業式に』

今日から一番長い2学期が始まりました。始業式では「“今”をどう生きるかで未来は決まる」ということをテーマに話をしました。夏休みの期間、生徒たちは様々な経験をしました。勿論思いっきり頑張ったと思います。でも、多分悔しい思いや悲しい思いをした者も少なくないと思います。その過去を変えることはできません。だから、その結果を真摯に受け止め、これからの生き方に活かしていくしかありません。よく「過去（と他人）は変えられないが、未来（と自分）は変えられる」と言いますが、今回はそれを拡大解釈して伝えました。



確かに“今”をどう生きるかで未来は変わりますが、その際に『あの時の悔しさや悲しさがあったから今の自分がある』と思えたりもするものです。つまり、過去に起こった“事実”は変えられませんが、その“解釈”が変わることはあるのです。だからこそ、“今”を精一杯生きて未来と過去とを変えましょう。一生懸命に取り組んだ人は、結果がどうあれ『面白かった』と言うのに対して、いい加減な取り組み方しかなかった人に限って『ショーもな』と言ったりもするものです。2学期は大きな行事があるだけでなく、高3生にとっては大学入試も始まるという、人生にとって大事な節目の時期です。今こそ、学校でしか経験できないことに全力で取り組みましょう。

昨日、中学校陸上部の4×100mRのメンバーが全国大会で優勝を果たしました。

これまで。京都市大会・京都府大会・近畿大会と優勝を飾ってきたメンバーですが、全国大会ではそう簡単にはいかないだろうなと思っていました。

何とも言えない緊張感のなかレースが始まりました。アンカーにバトンが渡った時には1位だと見えたが、ほとんど横一線。アンカー勝負になりました。

アンカーが一気にトップギアに入れて全速力で快走するうち徐々に差がつき始めます。約2mの差をつけて優勝。「来た、きた、キターっ！」ゴール付近で見ていた私は鳥肌が立つ思いでした。



全国には10,000校以上の中学校があります。その頂点に立ったのですから物凄いことです。実は、私がこの4月、グラウンドで練習する彼女らと初めて会ったとき、次のような会話をしました。「校長先生、私たちは全中で優勝を目指して練習しています。もし、全国大会に出られたら愛媛まで見に来てください。」「分かった。その時は必ず観に行くから優勝してな。」春の大会、夏の市・府・近畿大会、その間の厳しい練習、話し合いやトレーニングを重ねて、昨日、見事にすごい夢を実現させたのです。

彼女らから「夢はかなう！」ということを再認識させてもらいました。

2023. 8. 17. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『中学校近畿大会』

中学陸上の近畿大会で本校が総合優勝を飾りました。陸上競技は基本的に個人戦ですが、個人の成績がポイントとなり合計ポイント数で総合優勝校（団体優勝）が決まります。京都市及び京都府大会では圧倒的な強さで優勝を果たしましたが、近畿大会となるとなかなか難しいと思っていました。

4×100mリレーと2年生100m 走の優勝が大きくポイントゲッターになったのは間違いありません。しかし、表彰台は逃したものの200m走や円盤投げ、1500m走でのポイントも大きかったと聞きました。みんな、ホントにお疲れ様でした。

私が嬉しかったシーンを紹介します。表彰式終了後に選手たちが私のところにアドバイスを聴きにきてくれました。率直な感想と次の全国大会への激励を述べたのですが、前の生徒の肩の間から何とか私の話を目で聴こうと頭を動かしている生徒を観た時、この子たちの本気を悟ることができました。また、その後のことです。大会には京都市の先生方が監督やコーチとして京都チームに帯同してくれています。彼女らはその先生方にもお礼とアドバイスと聴きにいったのです。そんな生徒たちとそのような生徒を育てた先生方に“あっぱれ！”のカードを差し上げたいです。

その二日後、今度はソフトテニスの近畿大会団体戦を観に行きました。京都府までは順調に勝ってきた選手たちも近畿大会となるとスナリとは勝たせてもらえません。それでもベスト4までは駒を進めました。ここからは全国大会を目指す勝負です。実は、中学校のほうが高校より全国大会への出場が難しいのです。高校の場合は、各都道府県で1位になれば出場できますが、中学校の場合は、近畿で3校しかその場へ行けないのです。まずは準決勝です。この試合の前、次に対戦することになる準々決勝の試合を観ていました。その時、私のことを知らない第1シード校の監督が次のようなことを言っていたのをたまたま耳にしました。「決勝の相手は京都光華の方がええんや！テニス素直がやし、ずっとやりやすい。」その言葉通り、思い切ったプレーをする学校が対戦相手に決まりました。相手の選手は1本目から前衛にボールをぶつけにきます。“負けて元々”のガッツ溢れるプレーに翻弄され、終始相手のペースで戦うことになって負けてしまいました。次の3位決定戦も同様です。“格下”の相手です。1番手は4-0で勝ちました。2番手と3番手の試合は共にファイナルゲームにまでもつれましたが、“ここぞ！”という時に思い切ったプレーをしたのは相手の方でした。

全国大会への出場権を逃し、悔しい思いをしたでしょうが、本校の選手たちは多くを学んでくれたはずですよ。近畿大会や全国大会で勝つためのプレーが見えてきたように思います。この悔しさを2年生以下が来年以降へ引き継いでくれることを願います。



2023. 7. 28. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『“今” に全力を！』

夏休みになって 1 週間が経ちました。この間、中学生の夏季大会を中心に様々な大会やコンクールが行われています。また、現在、高校のソフトテニス部は北海道でインターハイ（全国大会）を戦っている最中ですし、今週末には茶道部が全国大会のため鹿児島県へ出発します。

今後もそれらは続きます。特に関西大会や全国大会を目指す部活動は中学部にも少なくなく、熱い戦いは継続しますし、一日でも長く頑張り続けてほしいとも思います。

それにしても、自分の好きなことに没頭できるって何と素晴らしいことなのでしょう。これこそ学生の、特に中学生と高校生の特権だと思います。

京都市立中学校の校長を退職して本校に赴任するまでの2年間、夏休み特有の“この感覚”を忘れていました。“生徒の活躍に心躍らせ、生徒や保護者と共に喜び、共に悔しがるこの感覚”です。そして、今こうして“この感覚”を持たせていただけることを心から嬉しく幸せに感じています。

常々言われているとは思いますが、生徒の皆さんには、自分の好きなことを思いっきりさせてもらっている保護者や先生、友人などに対しての「感謝の心」を忘れることなく目の前の“この瞬間”に全力を尽くしてほしいと思います。

高校のソフトテニス部がインターハイへ出発する前、応援旗に次のようにメッセージを書きました。「この一球は絶対無二の一球なり。されば、心身あげて一打すべし。」これは私の高校時代、部室の壁に額に入れて掛けられていた詩の一部です。私は「この一球」を「この瞬間」と置き換えて考え、今もこの詩を「座右の銘」にしています。

折角ですから全文を掲載します。是非味わってみてほしいと思います。

「この一球は絶対無二の一球なり」	福田雅之助（早稲田大学庭球部の卒業生）
この一球は 絶対無二の一球なり	
されば 心身あげて 一打すべし	
この一球一打に技を磨き 体力を鍛え 精神力を養ふべきなり	
この一打に 今の自己を発揮すべし	
これを 庭球する心といふ	

今という瞬間は二度とありません。だからこそ、その瞬間を大切にしてほしいと思います。「失敗をするな」と言っているのではありません。失敗を恐れず思い切って取り組んでほしいのです。私は既に60歳を越えました。だから一層、二度とないだろう“今という時”を大切にしたいと思っています。勉強にスポーツに芸術活動に、常に全力で取り組んでください。それが人を成長させます。また、それこそが教育です。



2023. 7. 23. (SUN).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『熱い夏を過ごせ！』

1学期が終了しました。課題がなかったわけではありませんが、生徒と教職員とが一つひとつの課題に丁寧に向き合った結果、無事に夏休みを迎えることができ、“ホッ”としています。

本校には、様々な背景のある生徒たちがいます。それらの生徒に真摯に向き合い、丁寧に指導している教職員の姿を観ると、『本当に、よくやってくれている』と思います。このように、丁寧に生徒に向き合い、とことん寄り添って生徒たちの個性と能力を伸ばしていきましょう。言い換えれば、預かった生徒たちを真に大切にすることです。このことは、今の公立学校では“しにくいこと”になりつつあるのではないかと思います。だからこそ、私たち私立学校に勤めるものが実現しなければならないとも考えます。



赴任前、「女子校」であることに少々不安と戸惑いがありました。しかし、いつの間にかそれはなくなりました。むしろ、『何ら変わりがない』と思うようになりました。さらに言えば、女子だけの落ち着いた雰囲気が好きになっています。男子がいないと休み時間や放課後の様子が全然違うことも分かってきました。外回りから戻ってくると、乱れのない服装や挨拶や落ち着いた雰囲気を実感することも少なくありません。熱心に部活動に励む元気な声は聞こえるのですが、それをまったく喧しいとは思いません。4か月を過ごしてみて、女子校の教師になっている自分に気が付いた次第です。

現在の京都光華中学校高等学校は、どこへ出しても恥ずかしくない学校だと思っています。いえ、むしろ私は、生徒が安心して教室や学年の階に居るという教職員と生徒との関係性では、他校に対して大いに誇れると思っています。特に20日に行った終業式の様子については、他校の教職員に対して自慢したい気持ちで一杯です。全校生徒の前で自分の思いを自分の言葉で表現できる生徒が、今回は8人も登壇してきました。聴く態度もよく、全校生徒と教職員とが一体となった終業式が行えました。

終業式で述べたことを改めて書き記しておきます。夏休み中、部活動や勉強など様々なことに取り組むことになるでしょう。それらに全力で向き合ってほしいと思います。中学生高校生の時期は人生の中で最も体力があります。自分のことを振り返っても、高校生の時の部活動は大学での練習よりもはるかにきつかったですが、翌朝には体力が回復していました。大学受験の勉強もそうです。睡眠時間は短くても深い眠りができていました。この時期だからこそ、熱い心で目の前のことに全力で、そして真摯に向き合ってほしいのです。そのことが中学生高校生の心と身体とを健全に育てます。

全校生徒と確認したことは次の3つでした。勉強には当てはまらないことがあるかもしれませんが、その精神は通じるものがあると思っています。

- ①「最後まで全力を尽くす」 ②「決して弱気にならない」 ③「最後まで声を出す」
- これからの35日間で、皆さんにとって「熱い夏」になることを願っています。

2023. 7. 14. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『自覚と責任』

今週に入って、まるで打ち合わせたかのように至る所で一齐にセミが鳴き始めました。いよいよ本格的な暑ーい夏の到来です。

今月もほぼ半分が経過し、気が付けばあと一週間で1学期も終わります。月日の経つのは本当に早いと感じているところです。

さて、最近になって何度か保護者や保護者会の皆さまの前でご挨拶をする機会がありました。同じようなお話しをしたのですが、その内容をより多くの皆様方に知って頂きたく、以下に改めて紹介します。



本校に赴任して3か月余りが経ちました。『京都光華の校長に成ったんだ』と強く自覚する場面が3つあります。

1 つ目は、校内での休み時間や部活動の試合等の応援に行った際に、私の姿を見つけた生徒が「校長せんせーい!」と言って手を振ってくれる時です。あの瞬間は、生徒たちをとてつもなく愛おしく感じるとともに、大きな喜びが込みあがってきます。

2 つ目は、本校の“悪口”に触れた時です。人と話しているときに本校のことを悪く言われたり、SNSへのマイナスの書き込みを読んだりすると、メチャクチャ腹が立ちます。そしてそんな時に『光華の校長に成ったんだ』と強く自覚もするのです。

3 つ目は、知らず知らずのうちに使う言葉にその自覚を感じるのです。具体的には、「うちの学校」という表現です。赴任早々の頃は多分「ここの学校」という言い方をしていたのではないかと思います。いつの間にか「うちの学校」と言うようになりました。「ここの学校」という言い方には第三者的に観ている感があります。

「自覚」が強まってきた分だけ「責任」を強く意識するようにもなりました。

本校に通っている生徒の大切な命を預かっている。この子たちに決して悲しい思いや辛い思いをさせてはならない。生徒たちの思いや願いを受け止め、それに寄り添い続ける。生徒たちの個性や能力を尊重し、それを伸ばして進路を実現させてやりたい。また、生徒の数だけ保護者の方がおられます。こうした人たちの期待に応えなければなりません。それが大きな責任です。どれだけできるか分かりませんが、私にやれるだけのことはしたいと決意しています。

“うちの学校”での仕事はまだ始まったばかりです。生徒や教職員、保護者の皆さんには理解していただかなければならないことや協力してもらわなければならないことがたくさんあると思います。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

今日、終業式で生徒たちにする話を考えました。1学期にやりきれなかったことはありますが、その振り返りよりも今後のことを中心に話そうと決めました。校長としての自覚と責任を大切に、生徒の成長を願って前を向いて進んでいきたいと思っています。

2023. 7. 7. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『特別な授業』

今年度は11月17日に光華学園「幼・小・中・高」あげての「研究発表会」を計画しています。

学校の研究発表会には「研究授業」がつきもので、ちょうど今、その日の授業者を決めているところです。一昨日の会議で私から候補者を提案しました。その際、「研究授業」についての私の考えを述べたので、ここでその場にいなかった教職員や生徒の皆さん、保護者・地域の皆様方ともそれを共有しておきたいと思います。

「研究授業って言ったって、何も特別なことをする必要はない。普段通りの授業をすればいいやん！」

研究発表会がポピュラーでない頃にはよくそんな言葉を聞きました。まずはそれに対して私の考えを述べたいと思います。

研究授業は特別の授業でなければいけません。その理由は主に2つあります。

1つ目は、授業づくりや学級づくり、あるいは学校をあげて、「研究していること」（研究テーマ）があって、それに向けての授業であるからです。テーマを設定する背景には子どもの課題があります。その課題を解決するために時間をかけ工夫を重ねて実践してきた授業を発表するのが研究授業なのです。

いくつかの例をあげます。授業の中に「対話」を盛り込む ICT を有効に活用する PC やポスターを活用して発表をさせる 討議を軸として授業をつくる etc 「生徒が受け身的で、発言の機会が少ない」という課題がある場合に行う研究授業を思いつくままにザッとあげましたが、こういうものです。

2つ目は、参観者にその授業から自分の授業づくりにとって有効な何か、参考にしてもらえる何かを掘み取ってもらうための授業であるからです。だからこそ、普段はやらない斬新なアイデアを工夫し、参観者に「こんな授業のやり方がありますよ」と提案するのです。その日のために内容の練られた授業を観た人が「この授業をそのまま自分の学級で実践することは難しいけれども、この部分なら取り入れられるかもしれないな」などと思ってもらえるような授業にする必要があるのです。だから、普段通りではなく、特別の授業でなければならないのです。

「研究授業は邪魔くさい」「授業はともかく、指導案を書くのが面倒だ」こんな声を聴いたりもします。研究授業に取り組む機会が少ない人ほどこういうことを口にします。実は何度もやっていると、「研究授業」に取り組むことで自分のスキルがアップするのが分かってきます。学習指導案を書くことが苦ではなくなってもきます。教師も生徒も『折角やるのだから、より多くの人に観に来てもらいたい』と思うようになったりもします。工夫を凝らして“特別な授業”を設計し実現してほしいと願います。11月17日、どんな「研究授業」が観られるのかが楽しみです。



2023. 6. 29. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『希望を叶えてほしい』

ピンクだったアジサイの花がその色を変え、近頃は更に深みのある色に変えつつあります。今週になって急な大雨が降ることが多いですが、案外アジサイは喜んでいるかもしれません。

さて、6月1日から始まった「教育実習」が昨日をもってすべて終了しました。校種や職種によって実習期間は2週間から4週間とまちまちです。今朝は、校門に一人で立つことになり、教育実習が終了したことを実感しました。実習生の一人からメッセージをもらったので紹介します。彼女は養護教諭を目指す元気な学生です。

『実習を終えて』

養護教諭 実習生 廣林 涼佳

養護教諭になるために4週間の実習期間を母校でお世話になりました。

生徒としてではなく、一人の教員として学校に通うと、生徒時代とはまた違う学校の姿が見えてきました。同じ年代の仲間とたくさん出会い、協力したり、思い出を共有したりできる場であるのは、学校ならではの環境であることに気づきました。

私は、養護教諭の実習であったため、1日のほとんどは保健室での生徒対応を行っていました。なるべく、朝の挨拶や廊下で声をかけるように意識しましたが、断片的にしか関わらず、生徒との関わり方について悩むことがありました。その時、実習の終了式で澤田校長が「生徒と生徒を結べる先生であってほしい」と話されていたことを思い出しました。それを意識して関わると、保健室に頻繁に来室していた生徒が、怪我で来室した一つ年上の生徒たちと保健室で言葉を交わすようになり、明るい表情や授業へ参加することができるようになりました。

今回のような関わりが全てではありませんが、校長先生のお言葉に学校の重要な役割の一つを強く実感した瞬間でした。この実習を通して、生徒一人一人が、自分らしく学校生活を送れるように関わっていける教諭になりたいと思いました。

この学生は4週間の教育実習を行いました。看護師として働いていた経験がありますが、学校の保健室の先生になりたいと決意を新たに頑張っています。教員免許を取得するうえで、教育実習は最後・最終の単位だといっても過言ではありません。社会人として働いた人が大学で学び直し、ようやく教育実習へと漕ぎつけたということです。ある時、看護師から養護教諭へと転身したい理由を尋ねました。彼女はICUに勤務していたそうですが、そこに運ばれてくる若者の中には大きな悩みを抱えて自らの心身を傷つけてしまう人もいます。そんな人、特に学齢期にある生徒の気持ちに寄り添い、悩みの解決に協力したいというのがその理由だそうです。とっても素晴らしい動機だと思いましたし、是非その夢を叶えてほしいとも思いました。

本校生徒の皆さん、皆さんも自らの夢に向かって果敢に挑戦してほしいと思います。教育実習生の生き様から夢に向かって頑張るということを再考させられました。



2023. 6. 22. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『夢のような時間』

20日（火）、「あけぼの会」（本校の中学高校保護者会）の企画で宝塚歌劇の鑑賞会に参加しました。劇団「四季」のミュージカルは大好きで、それこそ「ライオンキング」や「美女と野獣」、「キャッツ」などは複数回観ています。一方、宝塚歌劇の鑑賞は60歳を越えるこの年までで初めての体験です。本当に素晴らしい時間を過ごさせていただきました。

阪急宝塚駅に降り立った瞬間から、まるでディズニーランドやUSJ等のテーマパークを訪れたかのような感覚に陥りました。マンションやテナントなどの建造物、道路や街路樹など、街全体が『夢の世界』として設計されているようです。



大劇場の横にはホテルがありました。こちらもとてもお洒落で、大劇場と見事にマッチングしています。全国のファンがここに宿泊して歌劇鑑賞するのでしょうか。

劇場に入ると、その大きさに驚かされました。おそらく4000人ほど収容できるのではないと思われる広さです。私の席はやや端寄りでしたが、座ってみるとそれを感じさせないような設えになっていました。

今回の演目は「1789」。世界史が好きな人はこの数字を観れば“ピーン！”とくるものがあるはずです。そうフランス革命の起こった年です。自由と平等を求めて市民（国民）が絶対王政を倒していくのです。ヨーロッパ各国で同様の革命が勃発しますが、その中でも最も過激で多くの血の流されたのがフランス革命でした。

以下に今回のステージのあらすじを簡単に紹介します。

主人公はパリ郊外で農業を営む青年。重税に反対する父親を役人に殺され、土地も奪われた彼は社会を変えたいとパリへ出る。そこで若き革命家たちと出会い、自らも“新しい時代”を切り拓こうと運動に加わる。一方、ベルサイユ宮殿では、市民（国民）の苦しみなど意に介することなく贅沢な生活が繰り広げられている。「パンがなければケーキを食べればいいじゃないの！」という王妃マリー・アントワネットの有名な言葉はこの頃に発せられた。そんな王妃の息子（王太子）の世話役として宮中に勤める女性が主人公と出会うやがて恋に落ちる。この女性の父親がバスチーユ牢獄の火薬庫の門番だという設定は面白かった。バスチーユ牢獄には、革命の中心人物が投獄されていたほか、地下に大量の武器弾薬が保管されていたとされる。そこで、フランス革命は、投獄されている人たちの救出と武器弾薬を奪う目的でこのバスチーユ牢獄を襲撃するところから始まるのである。ステージは民衆が自由を勝ち取って終了した。

このストーリーが絢爛豪華な衣装と舞台装置で展開されるのですから観ている者が魅了されないわけがありません。また、歌とダンスは圧巻で、驚きと感動の連続でした。選ぴに選ぴ抜かれた俳優たちが練習に練習を重ねた結果の素晴らしい舞台でした。

「夢のような時間」を与えていただいた「あけぼの会」の皆様には心から感謝します。

2023. 6. 15. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『気づきが心を豊かにする』

皆さん、おはようございます。高校2年4組の〇〇〇〇です。
このような機会を与えていただきありがとうございます。
今回、私は「隠れた感謝」についてお話ししたいと思います。
私は普段吹奏楽部として活動しており、自主練のために朝すこし早く学校に来ているのですが、毎朝必ず会う人たちがいます。それは清掃員の皆さんです。この学校に通う人たちならば、一度は誰だって会うことがある人たちですが、清掃員の方々が毎朝何時から学校の掃除をしてくださっているのかを私は知りません。しかし、毎朝外の掃除に加え、廊下やごみ箱内のごみの回収など私たちが登校する前から、見えないところで清掃員の方々が頑張って掃除を下さるおかげで、毎日学校がきれいになっていることを心の底からうれしく感じるがあります。



他にも、部活の本番などで外に演奏に行くときに、私達が会場に着く前から準備をしてくださったり、演奏終了後の後片づけなどすべてしていただいたりしているボランティアの方々や会場のスタッフの方々がいます。このように二つの話以外にも、見知らぬところで助けられていることはたくさんあるのだと思います。皆さんも同様に何気なく日々を過ごしている中で、知らないところで誰かが助けてくださっていることが思っている以上に多いかもしれません。そうしたなかなか見えてこない部分にも感謝の気持ちを持ちながら、私も誰かのために何かをできる人になりたいと思いました。ご清聴ありがとうございました。

以上は昨日(14日)の朝の礼拝時に代表の生徒がおこなった「感話」の内容です。

今日の朝、早速清掃員の方に伝えました。「お知らせ頂いてありがとうございます。生徒さんにそのように言っていただいて、本当に励みになります。」その方はそう言っておられました。

ところで、この生徒は「感話」をすることで多くの人に自分を振り返る機会や身の周りのことについて考える場面を与えました。とても素晴らしいことですが、それは、彼女自身が成長できた部分があったからだと思うのです。世の中はいろいろな物事で溢れています。しかし、気づけずに過ごしてしまっていることが案外多いのかもしれません。例えば、道端に咲く草花や小鳥のさえずり、川のせせらぎや風の音、空気の湿り気などです。これらに目や耳や心を向け、その変化に気づけると、ちょっぴり心が豊かになるのではないかと思います。もっと言うと、道端の草花を美しいと感じたり、小鳥のさえずりや川のせせらぎ、風の音や湿気に季節の移ろいを感じたりできたら、それに気づけない生活よりも心豊かに生きられるのではないのでしょうか。

中学生・高校生の皆さんには忙しい毎日だと思います。その保護者の皆様方にとっても同様です。しかし、少し立ち止まって身の周りを見つめてはどうでしょうか。

「感性」を研ぎ澄ませましょう。新しい気づきがあれば、人生が今より少しだけ豊かになるかもしれません。生徒の「感話」からそんなことを思いました。

2023. 6. 8. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『優勝おめでとう！』

6月3日（土）・4日（日）の両日、丹波自然公園でソフトテニス部のインターハイ（全国大会）への京都府予選大会が行われました。3日は個人戦、そして4日が団体戦です。インターハイ出場は、高校生アスリートにとって、今も昔も最も大きな目標であり夢です。実際、40年以上前の私もその夢に向かって日々テニスコートでボールを打ち続けていました。



団体戦終了後に撮影した記念写真

個人戦では他校の追従を許さないほどの好結果を得ました。出場枠8ペアのうち7ペアを本校の生徒が占めたのです。決勝戦は本校の生徒同士で行われましたしベスト4にも3ペアが入りました。（ベスト8はすべてが本校の選手たちです）特に、4人しかいない3年生が全員出場権を得たことは大変うれしいことです。

このように書くと、翌日に行われた団体戦でも圧倒的な力の差を見せつけて優勝を成し遂げたように思われるでしょうが、実はそうでもありませんでした。個人戦の出場枠に1ペアを送り込んできた高校の実力は高く、決勝戦はハラハラ・ドキドキの連続でした。ソフトテニスの団体戦は通常「3ペアの点取り戦」で行われます。1番目に出場した個人戦の優勝ペアは、各ゲームは接戦したものの結果的にはゲームカウント4－0で勝利しました。2番目に出たペアはリードしながらも逆転され2－4で敗れます。相手ペアの“強気の攻め”に抗しきれなかったというところでしょうか。相手ペアは個人戦で負けた悔しさをこの試合にぶつけてきたという印象をもちました。

さあ、いよいよ3番勝負です。本校はキャプテンが前衛を勤めるペアが出場します。後衛は2年生です。前日は準決勝で敗れています。その試合は慎重にゲーム運び過ぎたように思いました。『思い切っていけよ！』心の中で何度も念じましたし、実際に何度か口にも出しました。ファーストゲームを奪うものの次の2ゲームを奪われ、一気に劣勢に立たされます。『自分たちの負けはチームの負け』その思いがどうしてもプレーを慎重・丁寧にさせます。それは相手も同じで、先に思い切った攻撃に出た方に軍配が上がるだろうと思われました。前日の反省を生かしてか、後衛が何本か思い切った強打をしました。はじめこそボールがコートの外に落ちましたが、この気持ちがよかったのでしょう。次に放ったボールはベースラインをかすめました。一度は“アウト”のコールがされたものの判定が覆り、その1打が決定打となって勝利しました。

「耐えて辛抱して、ここぞというときに思い切る。それも相手よりも先に！」まるで人生のあり方を見ているようでした。卒業生やその保護者の方も含めて多くの、本当にたくさんの応援の方に支えられて見事に目標を達成しました。インターハイへの切符を手にした選手たちには本番で一層輝いてほしいです。周りの方々への感謝の気持ちを忘れず、全国制覇を目指して頑張ってください。みんな、本当におめでとう！

2023. 6. 3. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『生き方を考える』

5月24・25日には中学1年生が、31日には高校1年生が「本山研修」を行いました。今更言うまでもなく、本校は浄土真宗大谷派の教えを建学の精神としている学校ですから、本山とは東本願寺を指します。

東本願寺へ行って研修をすると聞くと、どうしても早朝からお経をあげたり掃除をしたりするなど厳しい「修行」をさせられるのではないか、というイメージ

をもたされてしまいます。私もそのように思っていました、子どもたちの様子を観に行ったらそれが間違いであったことに気付きました。そこに学ぶ生徒たちは本当にイキイキとして楽しそにしているのです。

31日には、この研修の肝である「講義」を生徒たちと一緒に聴くことができました。「講義」が肝であるという所以は、生徒が、後に「座談」と称されるグループ会議でその内容について深く話し合い、話し合った内容を発表し合うというプログラムが用意されてもいるからです。この日の講師の先生は浄土真宗大谷派の寺の住職で、高校の「宗教科」の教師でもある方が勤められました。その内容は大変興味深く、仏教に対して深い知識を持ち合わせていない生徒にとっても分かりやすく、且つ考えやすいものでした。もっと言うと、親鸞聖人や仏教そのものの教えについて語られた場面は少なく、ほとんどは『どのように生きるか』『どのように考えるか』を考えさせられるものだったのです。その中の一つを紹介します。東日本大震災のボランティアに行った高校生の話なのですが、目指す大学に合格できず意気消沈していた高校生が、震災によって家族をすべて失ったおばあさんに逆に励まされたといったものです。この「講義」には「本当に大事なこと」と「本当は大事ではないこと」というタイトルがつけられていました。いろいろな話題がありましたが、「講義」を聴き終えてみると、このことについて深く考えている自分に気付くのです。

今改めて考えてみると、世界中のどんな宗教も『どのように生きるか』を教え、考えさせるものではないかと思うのです。

本校には「道徳」の時間がありません。「宗教」の時間をそれに替えることができると学習指導要領にも書かれているからです。「道徳」の時間はまさしく「生き方を考える」時間です。この日、「宗教」の時間の意味について深く考えさせられもしました。

今月24日には「人権学習」があります。この時間もまた「生き方について考える」時間です。人が幸せに生きる権利（＝人権）を踏みにじること、すなわち、平気で他人をいじめたり差別したりするような生き方をするのか、あるいは、見ても見えていないふりをするのか、または、「それは断じておかしい！」と思ったり訴えたりできるのか、一人ひとりがどんな生き方ができるのかについて、自分を深く見つめる機会にしてください。生徒たちにはよりよい豊かな生き方のできる人に育ってほしいです。



2023. 5. 27. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『新たな信頼関係』

2 日間ほどクール・ビズで過ごしましたが、その後は寒くて、しまい遅れていた長袖カッターシャツを着ることになりました。5 月の終わりって、毎年こんなに寒かったでしょうか。最近は日ごとの寒暖の差が激しく体温調節が難しいです。生徒の皆さんは、風邪などひかないよう留意してほしいところです。

さて、担任をしていた頃の昔話です。12月の3年生の進路を決める懇談会で、ある生徒とその保護者が、私（学校）の提案する高校よりも高いレベルの成績を要求される私立学校を受験すると言い出しました。『とっても無理だろう！』という言葉で封じ込めて「いったん預かります」と言って懇談を終えました。職員室でその旨を伝え、先輩の先生が「きっと、塾との間でそういう話になったんやろう。ようあることや。」と言われました。沸々と悔しい思いが沸き上がってきたところに先輩は次のように続けられました。

「俺らと保護者、俺らと私立高校よりも強い信頼関係を塾が結んでる。そこは、見習わなあかんし反省もせなあかん。」悔しい気持ちが吹き飛び、このことに対する強い関心と担任としての決意が芽生えました。

一昨日、学習塾に対して「学校説明会」を開催しました。多くの教室の長の方々が来てくださいました。各教室長の若さに驚いたところですが、その中に本校の卒業生がいました。本校教諭の質問に対してその卒業生が答えていきます。その中で自然と本校のPRがされるように工夫されていました。『この企画は面白い！』観ながらそう感じました。また、学習塾の代表の方がその他の方々に対して“本校の特徴（よさ）”をまとめた内容を発表するというコーナーもありました。本校で実施しているのですから自然とその良さが強調されます。一方で、塾の内部で行われる場合には、こうしてマイナス面も共有されているのかと想像すると恐ろしくなったりもしましたが、2 つともよい企画でした。夕方には責任者の方から次のようなメールが届きました。

光華中学校高等学校 校長 澤田清人様

本日はお忙しいところ弊社のためにわざわざお時間を頂戴し、ありがとうございました。先生方の丁寧なお話の中に、子どもたちへの熱い情熱あふれるお話や色々と改革にチャレンジされているところを感じ感動いたしました。また、学校見学の際、生徒のみなさまも元気に挨拶してくださり、素晴らしいと思いました。取り急ぎメールで申し訳ございませんがお礼申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。

絶妙のタイミングでメールされるところも含めて、こちらが見習わなければならないところが多く、メールの内容と併せて教職員に伝えました。

生徒との信頼関係、保護者との信頼関係、小中学校や地域との信頼関係のほかに、新しく学習塾との信頼関係の重要性に気付き、その築き方も学んだところです。



2023. 5. 18. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『たしなみ』

急に暑くなってきました。昨日は30度を超える真夏日になったようです。また、この暑さは今日も続き、私もとうとう半袖のカッターシャツで過ごすようになりました。まだ身体が暑さに慣れていないため、熱中症になるリスクが高いということも朝の情報番組の中で語られていました。今朝の職員朝礼でも、体育の後などは特に生徒の体調に留意してほしいと教職員に伝えたところです。



さて、私の友人の話を紹介します。彼は就職後に長い休暇をとってバックパッカーとなってアメリカを旅行しました。ハリウッド映画が大好きで、古いものから最新作までジャンルを問わず彼の知識と興味関心はアメリカ人の愛好者を超えるほどでした。「行く先々で出会った人とアメリカ映画について語り合うことが楽しみなんだ」と意気込んで旅立ちました。向こうに到着するなりそんな場面がやってきます。ところが、ハリウッド映画について語りたい彼に尋ねられたのは黒沢明監督をはじめとした日本映画についてでした。アメリカ映画が好きな彼は、実は日本映画についてはそれほど詳しくなく、相手は「なーんだ…」と興ざめしてしまったということでした。そのことを通じて彼が気付いたのは、外国人が日本人と話をする際には日本のことについて知りたいのだということです。

同じような話を友達の高校学校教諭から聞いたことがあります。高校の修学旅行で海外に行くことが流行りだした頃のことです。その高校では英語に力を入れており、生徒たちの英語力もなかなかのものでした。さて、訪問先の高校生と話す場面になりました。意気揚々とその場面に臨んだ生徒たちは向こうの生徒たちの問いかけにうまく答えることができなかったということです。英語力には自信があるものの、話題に対する知識やないからだということです。つまり、外国人は日本の歴史や文化、政治や経済などに興味や関心があり、そのことを中心に話をしたがるのです。いくら英会話が堪能でも、そのことを知っていなければどうしようもなかったということです。

「動く」→「動き」、「取り組む」→「取組」などのように動詞から変化した名詞があります。「たしなみ」もその一つです。「たしなみ」を辞書で引くと、①このみ・趣味、②心がけ・教養、③つつしみ・節制と書かれています。つまり、「仕事」ほどではないものの「遊び」ほど軽いものではないと考えてよいのではないかと思います。

本校は「伝統文化教育」に力を入れています。この学習は、伝統文化を身に着けさせることではなく、体験を通してその良さを感じその本質に迫らせることを狙いとしています。伝統的文化が長く続いてきた背景には、ただ「守る」だけではなく、「革新的な考え方」もあったことでしょう。この学習を“たしなむ”ことで、その歴史や技術だけでなく、もっと奥深いものに気付いたら、将来何かの役に立つかもしれません。

2023. 5. 11. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『よいところ』

私の出勤経路は今出川通から烏丸通を五条通まで南下してきます。烏丸通は信号機が連動していて一斉に「青」になるので、ついついスピードを出し過ぎてしまいがちです。今朝、烏丸通に入ったあたりで対向車が2台続けてパッシングをしました。『あっ!』と思ってすぐに減速をしました。その直後、私を抜いていった車が物陰から出てきた警察官に呼び止められました。そう、「スピード違反の取り締まり」をしていたのです。この出来事から次の3つを学びました。



一つ目は、何かのサインを見逃さず、迅速かつ適切に行動を起こすこと。このことは学校生活の中でも重要です。二つ目は、見ず知らずの人に助けてもらったのも、仏さまが導いてくださった何かのご縁と捉えて感謝の気持ちを持って暮らすべきであること。三つめは、急いでスピードを出しがちになっていた自分を戒めることができたことです。『信号の一つや二つ先に行けたところで、到着時刻にそんなに大きな違いはないだろう』と思うこともできました。

こんなことを書いたのも、昨日経験した『朝の礼拝』での感話に影響を受けたからです。普段のそれは Zoom を用いて行い、生徒は各教室で視聴するのだそうですが、今回は春の生徒総会と一緒にを行うため全校生徒が講堂に集まって実施されました。

『朝の礼拝』は宗教精神を基盤に据えた本校ならではの取組ですが、その内容は真宗宗教歌の斉唱に始まり「総礼」（代表して私がお焼香と合掌を行います）「三帰依文（さんきえもん）の唱和」、「感話」と続いていきました。私にとっては初めての経験でしたが、たいへん厳かで、生徒の心の成長にとってもその学びは大きいと感じました。特に、他学年や他学級の生徒の様子を観ることに意義があると再認識したところです。

先週から順次、京都市内外の中学校を訪問しています。本校の校長に就任したことで生徒募集に向けてのご挨拶が主な目的です。ほとんどの学校の校長先生は顔見知りで、ついつい思い出話のような長話をしてしまいがちですが、必ず伝えているのが上に書いたような「本校のよいところ」です。生徒募集に行っているのですから当然のことですが、今は1か月余りを過ごして私自身が感じたことを率直に話しています。その中で必ず話すのが次の2つの内容なので紹介します。

うちの学校の午前7時半ごろと午後4時半ごろの様子を観に来てほしい。部活動を頑張る生徒たちがガンガンやっている一方で、8時間目の授業が行われていたり、自習室や職員室前で大学生や先生に質問しながら自学している生徒たちもいる。生徒が、自らの個性と能力を思いっきり伸ばせる学校だ。国公立大学や有名私立大学に何人合格させたという部分では勝てない高校がある。けれども、本校に来てくれた生徒たちを大切にするという部分ではどの学校にも負けない。その2つです。

本校ならではの良さを教職員全員で自覚し共有して、確実にPRしていきたいです。

2023. 5. 6. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『部活動』

学校教育は「各教科」「道徳」「総合的な学習の時間」「特別活動」の4つの分野で実現されています。

中でも「特別活動」は、教育課程内のものと教育課程外のものに分けられます。「学年・学級活動」や「行事」は教育課程内、「生徒会・委員会活動」は教育課程内に位置づけられる場合とそうでない場合がありますが、基本的に「部活動」は教育過程外の「特別活動」であるとされています。

昨今、「働き方改革」との関係で、この「部活動」が話題になることが多いです。それが教育課程外だということで、教職員の本務ではないという立場をとる教職員が、若い人たちの中に増えてきたようにも聞きます。また、教師の過重労働の原因の多くが部活動の指導にあるとの指摘も社会で一般的になっています。部活動の指導に力を入れてきた者としてはやりきれない気持ちです。

さて、GW に入って、特に中学生の試合が中心的に実施されました。3日には陸上部、4・5日にはソフトテニス部の試合の応援に行ってきました。出場した選手達はみな、活き活きと頑張っていましたし、その姿はキラキラと輝いていました。もちろん、全員が満足いく結果を得られたわけではありませんが、それでも試合に一生懸命取り組んで学んだことはたくさんあったと思います。

どちらの試合会場でも、選手たちが観戦のお礼を述べてくれる際にアドバイスを求めてくれました。日頃から練習を見ているわけでもない者が細かなことは言えませんが、どちらでも次の2つのことを強調しました。

今日の結果に満足いかない人は、負けた理由を見つけてそれを真摯に受け止め、次の試合に向けての練習に生かしてほしいこと。一生懸命に練習に打ち込める環境を与えてもらっている周りの人への感謝の気持ちを忘れてはいけないこと。

5日の昼頃、学校へ戻ると吹奏楽部が暑い中のグラウンドでマーチングの練習をしていました。重い楽器を奏でながらの行進は体育会系部活動並みの重労働です。それでもみんな、来るべき本番に向けて一生懸命に取り組んでいました。練習を終えた陸上部の子たちが演奏に合わせて踊っている様子も可愛らしく実によかったです（笑）。

学生時代の一番の思い出を「授業」と答える人は少ないです。多くの人が学校祭などの行事や部活動に頑張ったことをあげます。特に部活動は、それに一生懸命に取り組むことで心と身体が鍛えられます。心身ともに強く逞しく、しかも謙虚で礼儀正しい魅力的な人、他校生の憧れになるような人を目指して励んでほしいと願っています。



2023. 4. 27. (THU) .

校長室の窓から

『この子らと共に』～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『女子校ならではの魅力』

本校は昭和 15 年の開校以来 83 年間、一貫して女子教育に取り組んできました。時代の流れと共に要求される女性の理想像は変化し、今や女性の政財界への進出は大いに進んでいます。欧米の例を見ても、今後はますますこの傾向が強まるものと思います。光華女子大学の PR チラシの中に次のようなことが書かれているので紹介します。



「女性の輝く社会実現」～80余年の伝統に裏打ちされた女性教育メソッド～

時代の変化によりその養成像は移り変わってきましたが、80余年の伝統に裏打ちされた女性の持つ能力を最大限に引き出す教育は今も進化を遂げています。

本学※の女子教育により個性、能力を伸ばし、さまざまなフィールドで自分らしく輝く将来を描きましょう。

※「本学」と書かれているのは、対象が大学生だからです

更に、中学校高等学校にも共通する女子教育メソッドを「光華メソッド」と呼んで3つ示しています。「方向性を示す」「寄り添う教育」「安心安全な環境」です。

う～ん、ここまでの文章はちょっと硬いなあ。これでは内容と特に魅力が伝わりにくいと思うので、具体例を交えて書いてみることにします。

大学の高見学長先生から「教育効果を上げるうえでの男女差」の話を聞かせてもらいました。数学の指導を例に挙げたそれによると、男子はある程度ヒントを与えると途中からは自分でどんどん解決方法を見つけて解いていくけれども、女子は解決策をたくさん示して、更にそれを一つひとつ丁寧に解かせることで自分に合った解法に辿り着くのだということです。これを聞いて思い出したことがあります。私は長くソフトテニスの指導に関わってきて、男子と女子の指導の仕方に違いがあると思っています。男子は同じ練習を1時間連続してできません。途中で飽きてしまうので、練習内容を次々と変える必要があります。一方、女子は同じ練習を1時間以上でもやり続けることができます。選手と指導者の双方が納得できるまで、じっくりと時間をかけて取り組ませることが有効なのです。

また先日、保健室を訪れた際に一人の生徒がしんどそうにしていました。どうしたのかと問うと「生理痛がひどくて…」と答えました。初めて会話した私に対してそう答えたのに驚きましたが、女子校ならではの安心感からの発言だと思いました。

本校の教職員は、こうした女子生徒の特性とその能力の伸ばし方を経験的に知っており、日々の指導に生かしています。これこそが女子校の良い点だと思います。

多くの学校が共学化していく昨今、女子校に勤める教職員は、女子校のよさについて自信をもって語る必要があります。今一度、教職員一人ひとりが「女子校ならではの魅力」について考え、それを言葉にし、皆で共有して、外部の人に伝えていく必要があると思います。これこそが入学前の子どもや保護者、学校等の関係者に対して真っ先に伝えるべきことだと思うのですがどうでしょうか。

2023. 4. 21. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『ワクワク感』

20日の木曜日、校内は朝から何やら妙に高揚感のある雰囲気になっていました。今年度赴任したばかりの私にとっては初めての「花まつり」が開催されるからです。「花まつり」はお釈迦様の誕生をお祝いするお祭りで、キリスト教でいえば、さしずめクリスマスに当たるのでしょうか。本来ならば4月8日がその日なのですが、他の学校行事との関係でこの日に開催されました。

前日の夕方から校舎の玄関にはたくさんの生花に囲まれたお釈迦様の像が飾られました。翌日の朝から、生徒や教職員が自由に甘茶を掛けるのだそうです。実際、翌日は多くの生徒がそのようにしていました。また、この日は、生徒がお釈迦様にお供えする生花をもって登校することになっています。登校時、いつもと違う登校風景を楽しく見せてもらいました。多くの子どもたちにとっては当たり前のことのようにですが、それでもカメラを向けると可愛くポーズを決める生徒が多く、この日を楽しもうとしている様子が感じられもしました。

式典が11時から始まるということで10時30分頃に会場である大学の校地へ行ったのですが、すでに多くの幼児や児童、生徒や学生、教職員が集まっています。準備をしたり直前のリハーサルをしたりしているのです。代表としてのお参り（灌仏といいます）のほか、献灯、献花、合唱に吹奏楽など、多くの園児や児童生徒、そして大学生に役割が与えられていました。そうそう、開会前の入場パレードの最後を中高生のバトントワラーが担っていたのにも驚きました。

当日は4月の気温としては異例なく暑い日で、幼稚園児から高校生までの参加者は陽を遮るものもない中での鑑賞で大変だったと思いますが、それ以上に会を楽しもうという気持ちが勝っていたのか、終始にぎやかで楽しい雰囲気で行進しました。保護者の方の参加や参観があるだけでなく、外部に対してもライブ配信していると聞き、感心するとともに、仏教精神に基づく女子教育を目指す本校にとってのこの行事の重要性を改めて強く感じさせてもらったところです。

ところで、行事を行う上で特に大切なことの一つに、参加する者に“ワクワク感”を持たせるということがあります。今回のように、始まる前に既にそれが出来上がっていると、その時点でほぼ成功が確信できるとも思います。

翌日は全児童・生徒・学生（希望者）、教職員で京都四条南座まで「若き日の親鸞」というお芝居の観劇に行きました。親鸞聖人御誕生850年の慶讃法要記念公演です。こちらも前日から“ワクワク感”いっぱい、生徒たちは大いに楽しみました。



2023. 4. 19. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『信じるということ』

WBCの盛り上がりから早くも1か月が経ちました。野球観戦が大好きな私は、準決勝のメキシコ戦と決勝のアメリカ戦の劇的な勝利の瞬間を思い出すと今も興奮します。

さて試合後、栗山監督の選手を信じぬいた采配が大いに話題になりました。不振に喘いでいた村上選手を信じ、大事な場面でも使い続けたことがメキシコ戦での決勝打につながりました。



同世代の人間として、※WBC 公式 HP より

また、選手と教職員という違いはあっても集団をまとめる立場の人間として、インタビューのシーンを観ながらそのコメントに共感し、心を震わせることも少なくありませんでした。というのも、私たち教師の世界でも同じことがいえると思ってきたからです。学校という世界でいうなら、まずは生徒の中にある“伸びようとする力”、“できるようになる力”または“立ち直ろうとする力”を信じることです。次に教職員の“仕事にかける思い”や“仕事をやりきる力”を信じることです。生徒や教職員を信じ、結果が出るまでじっと待つことは時にしんどくもあります。しかし、そうして良い結果が出た時には、両者の間に強い信頼関係が出来上がるものだと思います。

信頼関係を結ぶことは、生徒・教職員間、生徒間、保護者・教職員間、保護者間、そして教職員間において、その関係を良好に保つうえで何よりも重要です。信頼関係さえあれば何でもなかったことが、それがなかったために問題が大きくなったりこじれたりして、互いに嫌な思いをするという経験もたくさんしてきました。

「信頼」と国語辞典を引けば、「信じて頼ること」と出てきます。頼れる相手がいることはどのような場面でも心強く、安心して生活できます。そして頼れる相手を作るのはその人を信じることから始まります。教師は生徒から裏切られることがあるかもしれません。それでも生徒を信じ続けることが肝要です。そうすることで、生徒は必ず教師の思い描く方へ戻ってくるものだといこれまでの経験から自信をもって言えます。

20世紀初めのドイツの哲学者であるニコライ・ハルトマンは「人間関係の不思議は、相手の中にあると信じたものが育ってくることである」と述べています。自分たちの周りを見渡してみても、生徒と教師の関係や好きな人との関係など『確かに！』と思えるものが少なくありません。信じることで相手が育ち、信じてもらった相手を信じ返すことでお互いの間に信頼関係が生まれ、頼り頼られる関係になるのだと思います。

入学式の日、モーニングにスタンドカラーのシャツを合わせて着ていました。私の姿を見た中学生の何人かがコソコソ話しています。訳を尋ねると「校長先生、襟が立っています。」と指摘してくれました。「このシャツはこういう形なんや」と笑って返しながら、この子たちとの間に良い信頼関係が結べるであろうことを確信しました。

「信じるということ」はこんな些細な出来事から始まるのかもしれません。

2023. 4. 13. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『学校は楽しいところでないといふ』

朝のグラウンドで小学生が明るい声を上げて遊んでいます。また、中学校高等学校の先生が小学生の体育の授業を受け持ったりもしています。これまであまり目にすることがなかった小さな子たちの活動する様子を目にするようになりました。

「中学校高校の校長先生ですよ。」先生が紹介してくれると元気よく『こんにちは！』という声が聞こえます。近年、義務教育学校ができて公立校でも小学生と中学生とが同じ校地で学習することは珍しくなくなりましたが、高校生まで一緒にいるというのは私立校ならではの光景です。実によいもので、お互いにとってメリットがあることは間違いないと思います。 ※後片付けの時の写真です

私は小学校の教師を目指しており、採用試験も小学校を受けました。運良く合格し、最後の大学生生活を満喫しようと信州のスキー場にいました。携帯電話のない時代です。民宿へ帰ると自宅から電話がありました。何と、すぐに“産休先生”として勤務してほしいと教育委員会から連絡があったとのことでした。そこから約40日間、小学校で4年生の担任をしました。この時の教え子の中には今でも年賀状のやり取りが続いている人がいます。『この学校で勤務するのか』と思いきや、中学校教諭として採用されることになりました。当時は全国的に中学生の“荒れ”が大変厳しい状況で、理想と現実との間で悩んだことも今では懐かしい思い出です。やがて、人生の疾風怒濤の時期を支える中学校教育の魅力にとりつかれました。指導主事になった頃から、非常勤講師として大学や大学院で教師を目指す学生に授業をするようになりました。この営みも実に遣り甲斐が大きく、今も続けています。『高校生との関りがあればなあ…』と思っていたところ、今年になってその機会を得ました。これで小学校から大学院まですべての学校で児童生徒や学生と関わることができました。先日、京都市内全域で勤務したと書きましたが、すべての校種で教育に関われたことも大変貴重な体験です。

さて、どの校種にあっても大切なことがあります。学校は楽しいところでないといけないということです。毎朝、登校してくる小中高校生に「おはよう！」と声をかけます。明るく挨拶を返してくれる多くの子の中に、『何か課題を抱えているのかな？』と思わされる子どもたちがいます。そのような児童生徒も含めてすべての子が『うちの学校は楽しい！』『明日も来たい！』と思えるように努めなければなりません。

授業がよく分かること、信頼できる仲間や教職員がいること、夢中になれるものがあること等、“楽しい”に通じるものは多くありますが、一人ひとりに“居場所”と“出番”があることが何より大事です。教職員だけでなく、保護者会や地域の皆様方と一緒に、すべての児童生徒が明るく笑って生活できる学校を創造したいと思います。



2023. 4. 10. (MON).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『光華 “愛”』

7日に始業式を、そして8日に入学式を終えました。手前味噌ですが、共にとてもよい式だったと思っています。

始業式では、これまでの校長時代に実践してきた通りプレゼンテーションソフトを使って話をしました。慣れた形の式辞とは違うからか、生徒たちは

とても興味を示してくれました。話を終えた私は、こちらもこれまで通り生徒から感想や意見、決意などを求めました。実は今回は予め指名する生徒を決めてもいました。

一人目は2日（日）の「桜まつり」でお茶席を担当していた茶道部の生徒です。お茶をいただいた後に少し話をしたのですが、その際「私、学校が大好きなんです。朝早くから完全下校近くまで学校にいるので覚えておいてください。」と言われたのが忘れられませんでした。二人目は30年ほど前の教え子の娘です。この学校に通っていることが分かり、会ったこともない生徒でしたが指名することを密に決めていました。三人目はソフトテニス部のキャプテンです。彼女は、中学生時代の試合の開会式で私がしたあいさつの内容を覚えてくれていました。指名すると、腹を括った彼女らは壇上に上がってきました。『高校生ばかりやなあ』と思った私は、『私もっ…！』っていう子が中学生の中にいないのかと迫りました。一人の生徒が勢い良く手を挙げ、高校生から拍手を受けて登壇してきました。4人の生徒はとっても上手に自分の思いを語りました。会場から温かい拍手が起こり、生徒参加型の始業式が出来上がりました。

一方、8日の入学式は厳粛な中で整然と執り行い、前日のあったかい雰囲気とは全く異なるものとなりました。新入生たちはみな緊張感をもって臨みました。儀式的行事はかくあるべきという厳かな入学式が挙行できたと自負しています。式後、新入生の各教室を訪ねました。まだ緊張している生徒がほとんどでしたが、担任の先生の呼びかけで、保護者の方も交えた記念写真を撮影している学級がありました。私も入れてもらったのですが、撮影の際のムードは実に子どもらしく可愛らしかったです。

7日の放課後、出会った生徒の多くが始業式が楽しかったと言ってくれました。なかには「校長先生、今日のプレゼンよかったです！」と明るく評価してくれる生徒もいたりして、とっても温かい気持ちになりました。

全校生徒に触れて二日。目の前の子どもたちを本当に愛おしいと感じます。教職員からの大きな期待も強く感じます。そんな光華中学校高等学校に、そしてそこに居る生徒や教職員に対して深い愛情を感じていることを自覚してもいます。将にこれこそが「光華 “愛”」です。「光華 “愛”」をますます強め、深めたいと思います。また、本校に関わる多くの人にこの気持ちを共有してほしいと願ってもいます。きっとそのことが本校をグッと良い方向へと導いていくと確信しているところです。



2023. 4. 7. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students ～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『今改めて思うこと』

4月1日付けで京都光華中学校高等学校の校長として赴任いたしました。2年間離れていた校長職ですが、改めてその責任の重さと、その何倍もの魅力を感じているところです。校長室で仕事をしていると、部活動に頑張る声や楽器の音色が聞こえてきます。『ああ学校に戻ってきたんやなあ』と忘れかけていた感覚が呼び覚まされるのが分かります。

こちらに赴任して、これまでの2年間と比べて何倍もの速さで時間が過ぎていくように思います。種々の会議への参加、課題への対応と対処、その合間の生徒や教職員とのやり取り等、楽しさと喜び、そして遣り甲斐を感じながら数日を過ごしました。

教師としてスタートし、教諭・教頭時代23年間を過ごしたのが東山区の中学校、校長として赴任した中学校が山科区、その後転勤したのは伏見区の最南端にある中学校、退職後に勤務したのは北区の端にある大学、上京区の中学校や中京区の市役所に勤務したことがあったものの、西の方の学校に行ければ京都市内全域で勤務したことになると思っていたところに今回の赴任です。まったく人生は面白いものです。

今回の学校は女子校です。男子生徒がいないことに当初は戸惑いましたが、元気に挨拶してくれる生徒や楽しく会話してくれる生徒に接するうちにその戸惑いもなくなりました。「今度、君たちの校長として赴任した澤田です。よろしくね!」と自己紹介をすると、皆が可愛らしく応じてくれました。その言動が実に愛おしく『この子たちのために頑張ろう!』という気持ちを改めて強くしています。

また、公立校と私立校との違いも見えてきます。生徒や教職員の価値観や態度や様子、学校での生徒の活動や教職員の働き方など、『なるほどな』と改めて感じることも少なくありません。そうそう、忘れてならないのが充実した施設です。公立校の教職員なら『さすが私立校!』と思うだろう施設や設備が校内各所に整備されています。

そのような中にもあっても変わらないもの、いえ、変えてはいけないものがあります。

生徒を大切にする気持ちです。大いなる目標をもって本校に来ている生徒たちの中にも、何らかの課題のある生徒がいます。その課題があるから本校へきている生徒もいるのではないかと思います。その子たち一人ひとりを尊重し大切にしてほしいと最初の職員会議で教職員に伝えもしました。急速に少子化が進行する中で生徒募集が大きな課題です。そのような中でも本校を選んでくれた生徒たちがいるのです。

これらすべての子たちを真に大切にしたいと思いますし、全教職員でしなければならぬとも考えます。私の教師人生で、おそらく最後になるだろう学校の子どもたちを大切に、この子たちと共に明るく楽しく歩んでいきたいと思っています。

